
ふえいと！/リリカルイリヤ～！！ ～錬鉄者への道～

Twice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふえいと！ノリリカルイリヤ！！
　　～錬鉄者への道～

【Nコード】

N69380

【作者名】

Twice

【あらすじ】

神様に殺されリリカルなのはの世界に転生！？

アーチャー+αの能力をもらいVividの物語に乱入！！

少年の明日はどっちだ！！

原作始動～～～ 追記、ところどころに作者にも不可解な点や独自解釈が多々ありますと思いますけども、所詮、厨二病と切り捨てて下さいまし。現在物語と作者が道に迷ってるので更新が凍結中・・・

m () m

ブローグ的な何か（前書き）

始めまして野球少年です

ふう、小説って書くの大変・・・；

時間かかるけど、あんまり書けないし・・・

愚痴るのもこれぐらいにして、どうぞ！！

プロローグ的な何か

「あれ？・・・ここは？」

気づいたら真っ白なところ（部屋？）にいた。
そしたら、なんか目の前に土下座してる人がいる……。

「どうしたんですか？」

気になったので当然たずねてみた。

「すいませんでしたー！！！」

ちょ、いきなり謝られた！！？？

「実は、あなたは死にました……」

はい？アナタガナニライツテイルノカワカラナイヨ？

「私は、神様で、あなたのいた世界を管理しています」

へ。でその神様（自称）がいつたい私に何の恨みがあるのかな？

「ヒッ！実はですね・・・」

～回想～

「あっアイリスさ～ん」

私の助手であるアイギス。ドジっ娘なのが特徴です。

「アイギス、どうしたの？」

この子はいつも厄介事を持ってくるのです。

「あのですね、最近アイリスさんが持ってくる下界の本がいっぱいありすぎて、書類とかがぐっちゃぐちゃになってるんですよ〜」

あら……そんなにも持ってきてましたっけ？

「それですね……実は一枚破れた書類があっただんですよ……」

なんだ、そんなことですか。

「その書類のことなんですが……」

もったいぶらず、早くいいなさい。私は早くこの本（Fate /
s a t y n i g h t）が読みたいんです。

「その下界の人間のことを書かれていたようで……」

ナントイイマシタカ、コノコハ？

「それは、まずいですよ！！本当にまずい！！」

なんで早くいわなかったのですか！！

「いや、だってアイリスさん、マンガに集中しててきいてくれなかったじゃないですか！！」

ああ、どうしましょう。このことが上にバレたら大変なことに……。

「あっそうです。あの方法を使えば・・・」

～回想終了～

「なるほど。結局アイギスさんは何もしていないのにドジッ娘よばわりと……」

「す、すいません……」

むう、話が進まないな……。

「で、その方法とはいったいなんですか？」

「よくぞ聞いてくれました!!」

うわっ、いきなりテンション上がった……。

「一度しか言いませんよ。……あなたには転生してもらいます!!」

はい？ テンセイ？

「はい、転生です。しかもリリカルなのはの世界です!!」

リリカルナノハ？ ナニソレ、タベラレルノ？

「もしかして、知らないんですか？」

「まったくもって知らない」

おい、何故そこで「ハア、これだからゆとりは……」みたいな顔してるの？

「それじゃ能力つけて、私の地位のために逝ってきてくださいね」

ちょっと！ 漢字ちがう！ それに能力って何！？

「それじゃ、いつてらっしゃい」

「そおい！？」

私は足元に突然現われた穴に落ちたのだった……。

” いつか復讐してやる ”

そう思ったのであった

「あ、もう一枚破れてた」

ブログ的な何か（後書き）

はい、言わなくても分かってます。

ggd ggdですね！！

次はこんな事にならないようがんばります

能力説明（前書き）

時間がかかりましたが
本日二度目の投稿です
それでは、どうぞ！！

能力説明

うーん、……ハッ！

（あつ起きたみたいだね）

「イテテ……」

（みんな大好きアイリスさんですよー）

あゝ体が痛い、ここはどこd（きいていますかー？）

「聞いてるよ！！」

なんのようなんだよゝ、まったく

（能力の説明をするの忘れてたんですよ）

能力？なにそれ？

（あなたにはF a t e / s t a y n i g h tのキャラクターのアーチャーの力を授けましたゝゝ）

え？ やった！！ アーチャーの力だ！！！！

（ふふふ、気になるのですね。それでは教えましょう）

どうやっ t ・ ……うぐッ！！頭が割れる……！！

（大丈夫ですか？）

「うっっ……大丈夫です」

（本当のアーチャーの経験もあなたの中に授けたのでかなり強いですよ）

ん、おk……なんか、首のところに違和感が……。

（それはデバイスといって魔法を使うときに使うパートナーのようなものです）

黒と白の色をした、二つの剣のペンダント。

「干将・莫耶……」

ふと、口ずさむ。すると脳内にこの剣のことが浮かんできた。

（大分なじんできたみたいですね。ああ、忘れていました。この世界では前の名前は極力使わないで下さい）

「えっ、どうして？」

（まあ、こちらの都合ですよ……バレタラコマルノヨ）

いまいちよく分からないけど……まいつか

（この世界ではイリヤスフィール・フォン・アインツベルンと名乗って下さい）

「名前長いし、もろf a t eのキャラの名前だね」

（やはりf a t eを知ってましたか・・・ではイリヤと呼びますが、イリヤという名前が入っていましたら別に名前を変えていただいてもかまいませんよ）

「わかったよ」

（それでは、魔法を使ってみましょう）

「どうやって使うの？」

（まずはデバイスの認証登録からしましょう）

「わかった」

「 マスター認証イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

私の周りに三角形の魔方陣が現われる

「術式は、オリジナル主体ベルカ混合ハイブリッド
私のデバイスに固体名称を登録
愛称はアーチャー 正式名称【エミヤ シロウ】」

「アーチャー！Set Up!!」

私を魔方陣が囲み服装が変わる

「魔法弓兵アンリミテッドイリヤ推参!!」

手に黒い弓を持ち、肩と腰に紅い衣を纏った姿……。えっと、これはちょっと……。

「この格好結構恥ずかしいんだけど／＼／＼／」

（可愛いですよっ）

「で、この後どうすればいいの？」

（後は、アーチャーから詳しいこと聞いてください）

「はい」

（まあ、そんなわけだからがんばってすごしてくださいっ）

「わかったよ」

と、私は微笑む

（／＼／＼それじゃ、困ったら連絡してきてね）

「はい」

「それじゃアーチャー、これからヨロシク」

「分かった、マスター」

双剣がきらりと光る

「それでは、マスター」

「ちょっと待って」

私は今言わないとずっとそうなりそうな気がしたので呼び止める。

「なんだ？」

「マスターって言い方なんか堅苦しくて、名前でよんでほしいんだけど……」

「分かった、イリヤ」

又、きらりと光る

「うん、ありがとう、アーチャー」

「それでは、まず自分の体について調べてるか」

「どうやって？」

「トレース・オン同調開始と言え」

トレース・オンね。

「分かった、トレース・オン同調、開始」

能力説明（後書き）

野（えー、少し報告したいことがあります

イ（な〜に？

野（実は、この駄文をもうお気に入り登録してくれている
方がいるのです

イ（えー！！ホントー！！

野（本当です、これからも3日に一度は更新していききたいです
イ（がんばって〜

野（それでは、また会いましょう

次回【主人公説明】

イ（またみてね〜

主人公説明

名前 イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

真名 ????

容姿 中学生ぐらいになったイリヤ

身長 150cm

体重 40kg

肉体年齢 13歳

魔術回路 54本封印正常稼動

リンカーコア 正常稼動

魔力量 SSランク相当

アヴァロン
全て遠き理想郷 正常稼動

アンリミテッド・ブレイド・ワークス
無限の剣製 封印正常稼動

神様のせいで死んでしまった普通の一般人。

元からイリヤと似た顔という恵まれた容姿なのに

鈍感スキルがあるから、フラグが立っているのに気づかない朴念仁。

神様からアーチャーの知識、経験と魔術回路増量、魔力量増量と
アヴァロン

全て遠き理想郷、その他諸々をもらった。

バリアジャケットは、プリズマ イリヤの二巻のイリヤが
アーチャーのカードを夢幻召喚した姿を想像して下さい。

12月16日 更新

バリアジャケットを変更、アチャの赤原礼装に

魔導師ランク空戦AAAぐらい

fate風ステータス追加

筋力：C

耐久：D

敏捷：D

魔力：A

幸運：A

宝具：E→EX

保有スキル

対魔力A

直感A

魔力放出A

うっかり

投影

同調

強化

千里眼C

心眼（真）B

主人公説明（後書き）

野（ふう、これで一段落だ

イ（ねえ、何で私の前の名前が出てないの？

野（それは・・・

イ（それは？

野（考えるのが面倒だったからです！！

イ（・・・（じとー）

野（ぐっそんな顔したって、考えてないものはしょうがないじゃんか！！

イ（・・・さて、こんなおバカな作者はほっというて

次回「出会い」

野（う、うわーん！！

イ（はいはい、すぐ泣かない

出会い（前書き）

つ、つらい

書いてたら結構時間かった（汗；
それでは第四話「出会い」どうぞ！！

出会い

「ふう」

解析を終え私は一息つく、そして……。

「ねえ、何で私若返ってるの？」

たしか前世では、17歳だったはず。

「それは、多分アイリスの仕業だな」

むう、神様つてのは、なんでもありなのかな？

まあ、そうなってしまったものは仕方ないと割り切ることにしようと思った。

「では、次は投影を試みるか」

投影、それはアーチャーの攻撃方法のほとんどを占める魔術。普通の投影魔術とは違って、破損しないかぎり消えないのが特徴だけだね。

「分かった、こうかな？トレースオン投影開始」

イメージするのは、アーチャーが愛用している宝具、干将・莫耶。

「……出来た」

案外簡単だった気がする。

「では、その剣を向こうの木に投げろ」

よし、それじゃ・・・えい！

サク、バラバラバラ・・・。

「あ、あれ？」

「どうやら、まだ骨子の想定が甘いようだな。もっと投影して錬度を上げる」

木に刺さっただけでバラバラになるようじゃまだダメって事か。
。

そんな簡単に宝具が粉々なったら戦いようがないもんね。

「それじゃ、トレスオン投影開始」

side三人称

高町ヴィヴィオの朝はジョギングから始まる。

今日は、少し多めに走ることにしてコースを変えているようである。

「はあー、今日はクリスマスだって言うのに、ママたちはお仕事か
」

町は朝霧に包まれているがところどころクリスマス用のネオンで輝いているのが見える。

「残念だなぁ……んっ？」

と、ヴィヴィオの視界に不思議な光景が映る

「なんだろ、あれ……？」

黒と白の二色で出来た二つの山？のようなものがあるのが見えた。
トットトットと可愛げのある足音でそれに近寄る。

「誰か、倒れてる!？」

二つの山の近くに、ヴィヴィオより少し大きい身長綺麗な銀の髪をした少女が倒れていた。

「ッ!!大丈夫ですか!？」

必死になって少女に駆け寄る。

「う、うゝん」

どうやら少女は目覚めたようだ。

「ホッ、良かったゝゝ」

ホッと一息ついて、安心した表情をみせる。

「あれ？私どうしたんだろ・・・？」

「イリヤ、お前は投影のしすぎで倒れたんだ」

まだ慣れていないのに、とどこからか聞こえた。

「わっ!!」

どこにも見えないのに突然声が聞こえたのでヴィヴィオは驚いたようだ。

「あ、ごめんなさい、驚かせてしまって。ところであなたは……?」

イリヤがヴィヴィオに気づいて言った

「あ、わたしはヴィヴィオ、高町ヴィヴィオって言います」

ヴィヴィオは笑顔を浮かべて言った

「申し遅れました、私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言います。長いのでイリヤと呼んで下さい」

「（綺麗なひとだな）はい」

ヴィヴィオはそう思いながら返事をした。

「それと、私のデバイスのアーチャーです。アーチャー?」

「よろしくな、ヴィヴィオ」

こうして、二人は出会った。

「あの、大丈夫なんですか？」

翠と紅色の眼の色をした少女、ヴィヴィオが私に問いかける。

「多分平気だと思いますよ」

少し頭がぼやけるけど大丈夫だよ〜と私は考えていた。

「よければ、わたしの家に来ませんか？」

唐突に、彼女は私に言ってきた。

「はい？」

「（どうやらあいつはお前が心配のようだ）」

と、こっそりアーチャーが教えてくれた。

「こんな見ず知らずの私なんかをですか？」

私は少し疑問をもった。

「はい！―」

「（イリヤ、ここはあいつの言葉に甘えさせてもらおう）」

アーチャー……そこまでして幼女に気を掛けるとは……さすが口

リコンの鑑だ……。

「（それでは）お言葉に甘えさせてもらいます」

私はそんなアーチャーの気持ちを汲み取って承諾した。

「あ、わたしの家は、すぐ近くなんですよ」

「イリヤさん、シャワーを浴びますか？」

ヴィヴィオが問いかけてくる。

「あ、はい。ありがとうございます」

「もう、敬語はいいですよ」

「すいま・・・、ごめんね」

この娘、結構強引ね……と思いつつ案内される。

「タオル、ここに置いときますね」

はい、と答えながら服を脱ぐ。

「（アーチャー、この後どうするの？）」

と、相棒に聞くけど……。

「zzz・・・」

「はあ」

何故かスリープモード……。どうしようかな……。と、思っていたら。

「イリヤさん、わたしも浴びていい……。です……。か」

彼女が突然入ってきました。

「！！！？？？」

私は驚いて、ヴィヴィオのほうをみた！

すると、彼女は急に顔を真っ赤に染め、ボタンッ！ とドアを閉めました。

「イ、イリヤさんが……。お、男の人だったなんて／＼／＼／」

とドアの向こうで言っているのが聞こえた。

「（私って、そんなにも女性にみえるのかな）」

そう思いながら、とりあえず。

「ヴィ、ヴィヴィオ、タオルとってくださいない？」

「は、はい……。どうぞ／＼／＼／」

とりあえず、タオルを受け取っておいた。

「（あ、着替えどうしましょう）」

「（心配ごと無用だ）」

と、さっきまで寝ていたはずのアーチャーが起きて言いました。

「（アーチャー！なんで寝ていたの！）」

「（もう少しで、オーバーヒートしそうだったからな、少し冷却していた。」

まだ起動したばかりで、あまり動かないようだ）」

「（そうなの？で、なんで着替え大丈夫なの？）」

「（それは私の格納領域にお前の着替えが数着入っているからだ）」

「（なるほど、それじゃ出してよ）」

よかった、借りるはめにならなくて、とホッとして出してもらった着替えをきました。

「（そういえば、さっきまでは前の世界の服を着ていたな）」

なんでサイズが変わってたんだろ、とか思ったけどまた神様がなんかついたのだろう、と勝手に結論づけた。

出会い（後書き）

野（第四話無事投稿完了だ！）

イ（このお話どうしてこうなったの？

野（いくつか考えてただけ・・・

イ（けど？

野（こーゆー展開が好きだからこーしたの

イ（ふーん、これで私とヴィヴィオの仲悪くなったらどうするの？

野（大丈夫、大丈夫このあと君、××に××される予定だから

イ（なんか予想どうりだね

野（うるさい、こんなありきたりなことしか書けなくてすみません
でしたね

どうせ俺なんて・・・

イ（と、作者が再びいじけたしたので

次回「こーなる運命」

野（いーもん、イリヤなんか××で××な××にしてやるもん
イ（ちよっ！どーいうこと！？

こうなる運命（前書き）

ああ、短い、ね、眠い・・・！！
いつのまにやら、時間がたつて・・・
そんなこんなで、どうぞ第5話「こうなる運命」

こづなる運命

どうしてこうなったの？

「ねえ、イリヤちゃん、ここに住まない？」

話は数十分前に遡る。

　　数十分前

「あの・・・ヴィヴィオ？そろそろ機嫌を直してくれない？」

顔を紅くしたままのヴィヴィオに問いかける

「もう、もう大丈夫ですから／＼／＼／」

うゝゝ、どうすればいいのゝゝゝ！？

「大丈夫！？ヴィヴィオ！！！？」

突然、玄関の方から慌しい声が聞こえる。

「あれ、ママたち今日はお仕事じゃなかったの？」

どうやらヴィヴィオのママさんたちが帰ってきたようだ。

「実は、フェイトちゃんとクリスマスドッキリをしようって考えてただけど・・・」

綺麗な茶色の髪の女性と、金髪の女性が入ってきた・・・パパさんは？

「そしたら、突然強力な魔力反応があつて・・・、ところでその子は、ヴィヴィオのお友達？」

「あ、私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルと言います。長いのでイリヤと呼んでください」

「ご丁寧にも、イリヤちゃん。私は高町なのは、でっつちが・・・」

「フェイト・Ｔ・ハラウオンです、よろしくイリヤ」

いえいえこちらこそ、と言って話をもどす。

「（ねえ、アーチャー。もしかしたらその魔力反応って・・・）」

「（十中八九、私たちのことだろうな）」

「（だよね・・・）」

しーがない、ちょっと嘘でも交えて話を話そう。

「ちょっといいですか？」

「「どうしたの？」」「

見事にハモった・・・なんて置いといて、

「その魔力反応についてなんですが・・・」

（事情説明中）

「なるほど、つまり魔法の修行中に突然魔力が暴走して、気づいたら公園にいてヴィヴィオに

保護されちゃったと・・・ねえ、フェイトちゃん」

「うん、多分次元漂流者だね、どうする、なのは？」

二人が話合つて、私をどうするか話してる・・・あ、ヴィヴィオも話に加わった。

・・・

「それじゃ、・・・ってことでいい？」

「賛成ー！！」

どうやら話が纏まったようです。

「ねえ、イリヤちゃん、ここに住まない？」

そして、冒頭にもどる。

ハイ？ 住む？ どこに？

「ヴィヴィオにも聞いたら、一緒に居たいって言うし」

顔が紅くなったのがとれたと思っていたら、フェイトさんの発言で再び紅くなったヴィヴィオ。

表情が変わりやすい子だな〜と思っていたと。

「家族の人が見つかるまでの間なんだけど・・・」

「私、デバイスのアーチャーしか一緒にいなかったの・・・」

咄嗟に嘘を言って誤魔化す。

「あ、ごめんなさい……」

「い、いえ慣れているので……」

……とつっても罪悪感が沸いてきた。

「そのお話スイマセンがお断りしま」うるうる（泣）「せん!!」

しまった、ヴィヴィオに泣かれそうになったから、つい受けてしまった……。

「それじゃ、フェイトちゃん、早速書類作りに行こうか」

「うん、善は急げって言うしね」

そういうと、二人はそれはもう素早くどこかに行ってしまった。
ヴィヴィオはというと……。

「／／／／／」

顔を紅らめてブンブンと振っていた

ヴィヴィオside

あゝママたちに一緒に暮らしたいって言っちゃった／／／／／、
恥ずかしい／／。

でも、これでイリヤさんはわたしのもの……フフフ♪

いつなる運命（後書き）

野（第五話無事投稿完了！！

イ（三日坊主ですぐ飽きるとおもってたけど

意外に頑張ってるね〜

野（なんだよ、意外って、これでも結構つらいんだよ

イ（まあ、その調子で頑張ってるね

途中でやめたらどうなるかわかってる？（恐

野（Yes, Sir!!

イ（よろしい、それでは次回「クリスマスプレゼント」

野（糖分率上げよっかな〜

イ（えっ！！??

クリスマスプレゼント（前書き）

すこし、おくれていまいましたが

第6話「クリスマスプレゼント」どうぞ！！

クリスマスプレゼント

「それじゃ、買い物行こっか」

なのはさん・・・もといなのはママが言った
書類を作り終わって帰ってきたのはさんが、

「もう私たちは家族なんだから他人行儀な言い方は無しにしようか」

と、言った。こちらとしては多少気持ちが楽になった
だから、返事はもちろん・・・

「ハイ!」

「じゃ、私はなのはママって呼んでね」

「そしたら、私はフェイトママって呼んで」

「えっ?えっ?」

「わたしはヴィヴィオでいいよ」

「私(わたし)たちはイリヤって呼ぶから!」

「ハッ、ハイッ!」

そんな一方的な話し合いがあった

そして、場所は変わって、クラナガンのショッピングモールへ・・・

「フェイトちゃん、何買う〜？」

「クリスマスパーティーに使う料理の材料と、飲み物と・・・かな？」

現在時刻は午後2時30分頃、時間的には少し余裕があるね

「（イリヤ、ヴィヴィオにね内緒でプレゼント上げるんだ）」

と、なのはママが言ってきた

「（それじゃ、別れて行動してプレゼントを買ってきましょうか）」

「（うん、ありがとうね。私はヴィヴィオと一緒に買い物するから、イリヤはフェイトちゃんとプレゼントを買ってきて）」

「（わかったよ〜）」

ドッキリ作戦か・・・いいね

「フェイトちゃん、少し別れて買い物しよっか？《ヴィヴィオのプレゼントを買うために》」

「うん、分かった《私はイリヤとプレゼントを買うね？》」

「それじゃ、ヴィヴィオ行こっか《ありがとね、フェイトちゃん》

「うん!!」

元氣よく返事したヴィヴィオの背中を見ながらフェイトママと一緒にプレゼントを
買う手筈を決めていった

「ねえ、イリヤ」

「なに、フェイトママ？」

「イリヤってどんな魔法が出来るの？」

うーん、答えていいものか・・・下手すると厄介なことになる・・・

「気が向いたら、教えるよ」「動くな!!」「ッ!!」

遠くに少女にナイフを突きつけている、黒服の男がいた・・・なんてこった・・・

・・・どうやらナイフは魔力刃で出来てるみたいだ。だけど殺傷設定なんだろうな

「おい、その女!!レジにある金をありったけ寄こせ!!さもな
くばこのガキの

命はねえぞ!!」

「（フェイトママ、どうする?）」

「（そんなの、助けるに決まっているじゃない!）」

「（そう、だったら私に任せて）」

「（けど、危険だよ）」

「（大丈夫、私は強いから）」

フェイトママが何か言ってるけど気にしない
物陰に隠れて、デバイスを起動する

「（アーチャー、いくよ! Set up!）」

「やっと出番か、ヘマをするなよ・・Set up!」

紅い弓兵の力、アーチャーの力が顕現する

「トレスオン（投影開始）」

イメージするのは、射手が健在かつ標的を狙い続ける限り、
標的を
追いつける剣

しかし、干将・莫耶はほぼ完全に投影できるが

この剣はまだまだ基本骨子の想定が甘かったりする

「フルンテイング
赤原獵犬!」

投影した剣を弓につがえ、魔力を込め・・放つ!!

「早く、金を出せ!!こいつがどうなってmグハツ!!」

「よし、ヒット！！次、トレースオン投影開始！」

手にするのは、歪な形のナイフでキャスターの宝具、ルルブレ破戒すべき全ての符イカー

たしか、魔力で強化された物体、契約という関係、魔力によって生み出された生命といったもの

全てを「つくられる前」の状態にするという・・・これならリンク・コアを破戒できるかも知れない

・・・まあ、後がやつかいだからしないけど保険を掛けておく意味でだけ

トレースオン
「強化開始」

足に魔法で強化を行い、すぐさま犯人の下に駆け寄る

倒れている犯人の心臓に破戒すべき全ての符をつきたてルルブレイカー

「これでお終いだよ、悪者さん♪」

にっこり、微笑んでやった

その後、フェイトママが来て、

「イリヤ、大丈夫、怪我ない！？」

と、過保護当然なセリフを言いながら、犯人にバインドをかけている

「大丈夫だって言ったでしょ？私、強いから！」

本当はあいつに貰った力だし、アーチャーの戦闘経験をまったく引き出せていないし

実際、まだまだへばいんだけど・・・

「でも・・・」

「心配しないで、ママ」

「うーん・・・もう無理しないでね、約束だよ？」

「うん!!」

「あ、あの・・・」

犯人に捕まっていた子が私に話しかけてきた

「あ、大丈夫だった？怪我・・・ないよね？」

「はい、あのよろしければお名前を・・・」

「私は、イリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、イリヤって呼んで、でこの人は・・・」

「私はフェイト・Ｔ・ハラウオン、フェイトでいいよ」

「私は、美遊・エーデルフェルト、ミュと呼んで下さい」

「ミュ・・・」

「なんでしょうか？」

「ううん、なんでもないよ」

前の世界にいた、私の親友に似てると思ったけど、ちがうよね？

ミユはそのまま、後から来たママさんに連れられて去っていった
ミユのママさんからは、かなり感謝をされ、また会ったときには必ずお礼をします

と言っていた

そして、私たちはというと・・・

「色々あったけど、やっとヴィヴィオのプレゼント買いにいけるね」

「もうすぐ、集まらないといけないから、急ごうか」

現在時刻は、三時ちょっと過ぎ、三時半には集まるから急がないといけない

「ヴィヴィオって、何がほしいんだろ？」

「ううん、まだ三年生だしヌイグルミかな？」

「それじゃ、Let's Go!!」

・
・
・

「これ、いいんじゃない、フェイトママ？」

「あ、いいね。これにしようか」

手に取ったのは、キツネのヌイグルミ。結構大きく、ノイちゃんといらしい

「すいませ〜ん、これ下さい」

「はい、ありがとうございます。ラッピングはなさいますか？」

「はい、クリスマスプレゼントなので」

「分かりました、少々お待ちください」

5分程すると、店員さんが戻ってきた

「こちら、2万4800円になります」

えっ結構高いな〜、最近のヌイグルミは・・・

・
・
・

「なのは、買い物終わった〜？」

「あ、うん。ちょうど終わったよ」

「それじゃ、帰ろうか」

「はい」

さて、現在時刻は4時ちょうど、パーティまであと2時間です
イリヤスフィール・フォン・アインツベルンこと私、イリヤは台所に
立っています。ここからは私の腕の見せ所、台所とは戦場なのです
！！

本日のメニューは、ローストビーフ、魚介のオードブル、鶏肉のパ
エリアetc・・・

などです・・・え？短時間でこんなにも作れない？フツ、そんなの
関係ありません

私に不可能など無いのです。特と見るがいい、私の真の実力を！！
！注（イリヤです

～一時間後～

「どうして、一時間でこんなにもつくれるの・・・？」

「わかんない、けどどれも手抜きなんてしてなさそうだし・・・」

「イリヤすご～い！！」

とこのように三者三様のコメントを頂きました

「それでは、クリスマスパーティをはじめましょう！！」

「「「は～い！！」」」

・
・
・

「「「ご馳走様でした～」」」

「はい、お粗末さまでした〜、デザートもあるけど、お風呂入った後に食べる?」

「うん!」

かなり、好評ですね。それと・・・あの二人お酒を開けたね・・・二人ともかなり酔っ払っています

「イリヤ、ちょっといいかな・・・?」

「心配しないで、すぐ終わるから・・・」

顔を紅くして、少し眼が据わっているように見えるお二人さん

「な、なんですか・・・?」

手をワキワキさせながら、近づく二人・・・いや三人!??

「ヴィヴィオ!??」

「イリヤ」

クツ、ヴィヴィオ、お酒はまだ飲んではいけないのに、なんで飲んでいる・・・

「一緒に風呂入ろ!!!」

その瞬間、私は凄い勢いで引っ張られて風呂場に連れ去られてしまった

ピン〜ポン〜パン〜ポン〜

ここからは音声のみで、お聞き下さい

「か、髪ぐらい一人で洗えるよ〜／＼／＼／＼／」

「ダメ、こんな綺麗な髪なんだから綺麗にしないと」

「体は洗えるよ〜／＼／＼／＼／」

「背中洗ってあげる〜」

「前だけは、前だけは！！／＼／＼／」

「フッフ、綺麗にしてあげる〜」

上から

イリヤ

フェイト

イリヤ

なのは

イリヤ

ヴィヴィオ

となっております

地獄のような時間、別の人には天国のような時間は終わり・・・

「「「頂きま〜〜す」「」」

現在はデザートの間になりました

「「「ご馳走さまでした」「」」

「早ッ!」

今は、九時過ぎ、もうそろそろヴィヴィオは眠くなる頃かな？

「ママ〜、わたしもう寝るね〜」

「おやすみなさいヴィヴィオ」

「おやすみヴィヴィオ」

「おやすみ〜」

ちょうどだったみたい

「さて、それじゃあ、私の魔法について話しましょうか」

「そうそう、突然なにも無いところから剣が飛び出てくるんだもの、

気になってしょうがなかったわ〜」

「フェイトちゃん、イリヤの魔法見たの？」

「うん、実は・・・」

〜事情説明中〜

「なるほど、そんな事があったの・・・」

「私の魔法は主に剣をつくる、投影魔法です」

「剣、どういうこと？」

「こつという事です、トレスオン投影開始」

私の周りに無銘の剣を創り出す

「わっ凄い・・・」

剣を消し、再び向かい合う

「一応、レアスキルのようなものだけど、あまり知られたくないの」

「どうして？」

「投影できるものの中に、ロストログア並の力を持つ武器があるの」

「「ッ!」!」」

ゲイ・ボルク 刺し穿つ死棘の槍やルールブレイカー 破戒すべき全ての符、

アンリミテッド・フレイド・ワークス そしてなぜか無限の剣製内にある乖離剣エア、最後のは本当に危険だ・・・

あるって事は投影できる可能性があるわけだし・・・

「けど、暴走なんかしないし第一投影しなければいい」

「そうだね、一応管理局に行っておく？」

「うん、明日あたりにでも連れてってください」

けど、剣を創ることだけにしとかないと・・・刺し穿つ死棘の槍と
エキスカリバーか約束された勝利の剣とか、知られたら不味いものあるし・・・

「決まりだね、そうだ、ヴィヴィオのプレゼント今のうちに置いて
おこうか」

「あ、それじゃ私が置いておくよ」

そういつて、ヴィヴィオの部屋に行く

「ねえ、なのは」

「なに、フェイトちゃん？」

「これからは、幸せな生活を送れるかな？」

「うん、きっとできるよ」

クリスマスプレゼント（後書き）

野（やっとひと段落だ）

イ（おつかれ）

野（今回は詰め込みすぎた．．

イ（ミユとはどういう風に絡ませるの？

野（一応考えてはいるよ、次は前世のお話になるかな？

イ（いよいよ私の真の名前が明らかに．．．！！

野（それでは次回「過去を振り返る」

イ（よろしくね）

野（イリヤ、実は1万PV突破してたんだ

イ（ホント！！！？？

過去を振り返る（前書き）

えー今回は結構ネタバレっぽいものがありますので
そこんところを少々気をつけてみてやって下さい
あと、gdgd&短いのはデフォなので大目に見てください
それでは、第七話「過去を振り返る」どうぞ！！

過去を振り返る

クリスマス翌日、私、イリヤはフェイトママに連れられて管理局に行っている途中です。なのはママはヴィヴィオと一緒に留守番です。管理局に車で向かっている途中、私はふと昨日助けた少女のことを思い出していた

「（あの子、たしか前世でみたことって言うか友達だったんだよね）」

「

確かあれば、アメリカのボストンの某有名大学にいたときだった

「アメリカ、ボストン州」

私の前の名前は、柊咲^{つばき}、大学で一番賢いらしい

私は一度見たものや聞いたものを絶対忘れないので、いつしか天才と呼ばれていた

運動もかなり出来て、50メートルは5秒3が最高タイムだった

そんな私だから周りからは妬みや嫉妬もかなりあった

いつか忘れたけど、一人でいた私に声をかけてくれた子が一人いた。黒い髪で黄色い眼をした、日本人。

「ねえ、一緒に帰らない？」

そう言われ、ふわふわと彼女について行った

「あなたが、柊さんね？私は神城美遊^{かみしろ みゆ}ヨロシクね？」

「ど、どうも・・・」

私はこのとき混乱していた。最初のころはみんな話してくれたけど、最近是谁も話をしてくれない

「私もあなたと同じ、一人ボツチよ」

「えっ？」

この人なんて言った？

「私と同じ？」

「そう、あなたと同じ、私も周りから避けられている」

話を聞くと、私について次に賢いらしい。そして自分の趣味も影響
していて・・・

「あの、あなたは俗に言う、オタクって言う人なの？」

言った後に気づいた、お、怒られるかも・・・

「そうよ」

ズテツそんな音を立てて私は転んだ

「いいじゃないよね、私の趣味がどんなでも。なのに周りはこんな奴に負けてるとか
思っ
て無視してくるのよ・・・」

あの子と出会ってから私は変わったのかも知れない
多少オタツ気が出てきた気もしないが・・・
彼女の趣味で一番興味があつたのが「F a t e / s t a y n i g
h t」だった

正義の味方を目指す一人の男の物語といえば、聞こえは良いのだが
いかんせん、それは18禁ゲーム・・・

実際私は、美遊がしているのを隣で見えていたけど

・・・その・・・ね？いわゆる「十八歳未満観覧禁止」なところも
あるわけですよ

そのシーンが出てきたところの雰囲気は・・・楽に死ねる・・・

そういえば、この世界に来る前は彼女の家に行って遊んでた気がする
前の世界じゃ死んでることになってるのかな・・・

昨日助けた子とそっくりな事はとりあえず保留にしておこう

s i d e 美遊

昨日あつたあの子、咲に似てたわね。それにあの宝具
フルンテイング ルールブレイカー
赤原獵犬と破戒すべき全ての符、

両方ともF a t e のもの・・・

あの子も来たのかしら、この世界に？

一緒にいた人はフェイトと言っていた・・・

つまりここは、リリカルなのはの世界ね

たしか、引越し先の家の向かいに同じ名前の人がいたわね・・・

あと、なのはとヴィヴィオもいたし・・・

もしかして、咲も一緒に住んでたりして！！

なーんてね、そんなマンガみたいな事・・・ありそうね

なんせ、転生したんだもの。セイバーの能力を手に入れて・・・
アーチャーの能力は多分咲が持っているんでしょ

そういえばあの子、かなり勘違いしてたわね

話しかけたときは、少し嘘をついちゃったけど・・・

あの子はかなりフラグ建てといて、それを全てスルーするんだもの
そりゃ、男からは嫉妬の眼で見られるでしょう

まったくこれだからリア充は・・・かくゆう私もフラグを建てられ
たり

されたのだが・・・

まあ、面白いことになりそうね

それはそうと、あの神様にどうやって

復讐しようかしら・・・？

過去を振り返る（後書き）

野（更新遅れてスイマセン！！

イ（ダメじゃん、作者

ミ（このヘタレ、ゴミ作者が

野（シクシク・・・本日よりこの反省会に参加させます

美遊・エーデルフェルトです

ヨロシクしてやってください・・・

イ（よろしく〜

ミ（まあ、よろしくね

野（次回予告なんだけど・・・

イ・ミ（言わんでもフィンキでわかる・・・

野（スイマセン次回・・・

「未定」

イ・ミ（ハア〜

野（は、初感想貰ったよ！！

イ・ミ（ホントー！？

野（誤字大量修正のお知らせと共に・・・

イ・ミ（ま、がんばって

シグナムに会うと模擬戦になるのは世界共通 by 美遊（前書き）

言い訳はしません、ただ少し言わせてください
スイマセンでした————!!!!!!

シグナムに会うと模擬戦になるのは世界共通 by 美遊

さて、皆さん

今私は訓練場にいます

そして目の前には

「犯罪者を一瞬で無効化したのか・・・フッフ、早く戦ってみたいものだ」

・・・バトルジャンキー戦闘狂がいます

まあ、簡単に説明すると

- 1・本局に着く
- 2・シグナムさん発見！！
- 3・フェイトママとシグナムさんがお話をする
- 4・話のネタに私が使われる
- 5・流れで模擬戦フラグと死亡フラグが立つと、こんな感じ。

もう、逃げられないのでしかたがないから
戦いましょう、戦争！！、戦争！！、戦争！！
すいません、へんなテンションになりました・・・

「（ねえ、アチャさん）」

【（なんだアチャさんとは）】

「（気にしない。私のBJって変えられないの？）」

【（なんだ、そんな事か）】

「（そんな事って・・・）」

【（まあ、出来るぞ）】

「（ホント！？じゃあ、設定ヨロシクね）」

【（わかった）】

よし、これで心配事は無くなった
あのB」はかなり恥ずかしかったからね

「シグナムさん、それじゃ戦いましょうー!!」

「フッフッフ・・・そうだな」

なんか怖い!!

「手合わせよろしく頼むぞ、イリヤスフィール」

「イリヤです」

「イリヤスフィー」「イリヤです」・・・イリヤ」

さあ、戦闘開始だ!!

「アーチャー!!」

「レヴァンティン！」

「Set Up!!」

私のBJは・・・おお、アチャさんと同じだ!!

カッコイ・・・

シグナムさんは、騎士甲冑っていうのかな？

歴戦の騎士って感じた

「それでは、こちらから行くぞ!!」

私は、すぐに無毀なる湖光を投影し、迎え撃つ

ちなみに、これはやっぱり基本骨子の想定が甘いけど、絶対に刃毀れはしない

「フッ！ハッ！」

「クッ・・・フン!!」

重い斬撃を無毀なる湖光で受け、反撃する

「いい剣だな!!我が剣、レヴァンティンの斬撃を受けきるとは!!」

「この剣は、絶対に毀れることはないですから、安心出来ますよ!!」

・
・
・

「（このままじゃ体力が底を着く・・・一旦距離を取ろう）」

斬撃の間の一瞬のスキを見つけ、手の中に投影した宝石に魔力を込める

「セツトA n f a n g ! !」

【サインZ e i c b e n ! !】

「グレイブニル【獣縛の六枷!!!】」

バーサーカーすら拘束する瞬間契約レベルの宝石魔術
だけど、込めた魔力が雑すぎたから多分早く出てくと思う

「今のうちに!!」

すぐに上空に逃げる・・・上空?

「あれ、私空飛んでる!?!」

【どうやって、飛んだんだ・・・?】

え、魔法って飛べるものじゃないの?

「って、シグナムさん出てきそうだ!!」

とりあえず、この手段しかないな・・・

「なかなか、強力な結界だったが騎士には・・・!!」

私は、アロンドイト無毀なる湖光をシグナムさんに投げつけ

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

その宝具の魔力を破裂させる

「クッ！カートリッジロードー！」

「紫電一閃！！」

同時に、シグナムさんが紫電一閃を繰り出し爆発を防ぐ
煙が立ち込めるなか、私は次の一手の準備をする

トレース・オン
「投影開始」

イメージするのは、黒い弓と黒鍵6本。それをすぐさま弓につがえ
放つ

sideシグナム

中々やるじゃないか、流石テストロッタのお墨付きを得た奴だな
しかし、私も烈火の将として遅れをとるわけにはいかん
私は、レバンティンにカートリッジを一つ消費させる

【レバンティン、シュランゲフォルム】

さらにもう一つ消費させ、

「飛龍・・・一閃!!」

sideイリヤ

取り合えず様子見た・・・

「飛龍・・・一閃!!」

あり? 黒鍵が飲まれて消えちゃって・・・ってこっち来るし・・・!!

「や、やばっ!! とりあえず〜ロー・アイアス熾天覆う七つの円環!!」

骨子の想定がままならないまま投影する・・・4枚しかない
とゆうわけで、魔力をつぎ込み衝撃に備える

パリン、パリンと割れていく光の壁

そして、最後の一枚・・・少しヒビが入ったが無事守れたようだ
投擲武具に対しては絶対的な防御を誇るけど、今回はやっぱりダメ
っぽい

「危ない、危ない」

内心ヒヤヒヤしながら、次の宝具を投影する
煙が晴れ、シグナムさんが剣を構えている

「ほう、我が飛龍一閃を防いだか。しかし、まだまだ終わらんぞ!」

レバンティンから、カートリッジが消費されベルカの魔方阵が現われる

私は投影した勝利すべき黄金の剣に魔力を込める

「いくぞ、紫電・・・」

「勝利^{カリ}すべき・・・」

「「一閃！！／黄金^{バーン}の剣！！」」

お互いの剣から、高密度の魔力が吐き出されぶつかりあう

「はあ、はあ、次で終わりにしません？疲れました」

「ふう、そうだな。ではお互い最高の一撃で終わろうではないか」

「そうですね、そうしましょう」

「I am the bone of my sword」（我が骨子は振れ狂う）」

「レヴァンティン、ボーゲンフォルム」

「どうやら、私たちの最高の一撃は奇しくもお互い弓という武器を用いた攻撃になったのだな」

「そのようですね」

乖離剣？あれは投影できなかった・・・なんか中身が無いすつからかんの剣になっちゃうの

お互いの矢を弓につがえ、同時に手を放す

「偽・螺旋剣（カラドボルグEE）！！！」

「駆けよ、隼！！」

・
・
・

sideフェイト

あれ？シグナム、ただランクを測るだけじゃなかったの？

ああゝゝ、訓練場がぼろぼろに・・・

割とイリヤも乗り気だから、止められないし・・・

・・・どうやら煙が晴れてきたみたいだね

って、イリヤ！？倒れちゃってるし！？

ど、どうしよう・・・なのはに怒られちゃう

とりあえず、救護班を呼んでこないとゝゝ！！

sideシグナム

私としたことがつい熱くなりすぎた

・・・しかし、あの子の剣技、まだまだ雑なのだが・・・一撃が重
いし

それに、私の剣を全て防いできた・・・

まだあんなに小さいのに一体どんな訓練をつんだのだろう

まだまだ、私も負けていけないな

シグナムに会うと模擬戦になるのは世界共通 by 美遊（後書き）

野（申し訳ありません、読者様

イ（ねえ、なんで更新遅れたの？

ミ（しょーもない理由だったら約束された勝利の剣
エクスカリバー

の真名開放よ

野（実は、学校の方で期末試験があつて、PC禁止令を出されてい
たんです

イ・ミ（で？

野（それで、更新が遅れたんです。で、ですが今回はテスト結果は
中々の出来でした。もう少ししたら、冬休みなので

更新回数を増やしていきます

ミ（まあ、がんばんなさい

イ（次回のリリカルVividは「正月は色んなことがあつた。し
かし

それを言うとは私は恥死する by イリヤ」

ミ（・・・一体なにがあつたの？

イ（聞かないで・・・

野（簡単な言つと××とか とかバキュン！！とかそんなところ

ミ（これ書くと18禁ね・・・

4万PV突破につき美遊のステータス発表

名前	美遊・エーデルフェルト
真名	????
容姿	中学生ぐらいになった美遊
身長	152cm
体重	乙女秘密
肉体年齢	13歳
リンカーコア	SS - ランク相当
f a t e 風ステータス	
筋力：C	
耐久：D	
敏捷：D	
魔力：A	
幸運：B	
保有スキル	
直感A	
魔力放出A	
カリスマD	
追記：セイバー並の回復力 バリアジャケットはセイバーの甲冑でどうぞ	

デバイスはちっこいエクスカリバーの形をしたやつです。名称は「セイバー」

4万PV突破につき美遊のステータス発表（後書き）

野（みなさま、ご愛読ありがとうございます！！

イ・ミ（ありがとうございます！

ミ（そーいえば、私はいつになったらでられるのよ？

野（・・・考えとく

ミ（^{エクス}約束された・・・

野（ちよ、あぶないって！？

ミ（^{カリバー}勝利の剣！！

野（いやーーーーー

イ（まあ、バカな作者は置いといて

主人公説明も更新しましたので

そちらも見といてくださいね

野（作者には、地球にいつてアリサとすずかに若返り薬を飲ませる

計画がありました・・・

イ・ミ（えっ！！！？？

正月は色んなことがあった。しかしそれを言つと私は恥死する b y i r i y a (前

お、俺は悪くない!!

モンスター○ンターが面白すぎるから

いけないんだ!!

・・・すんません、アホな作者で・・・

どうでもいいですが、もう一つ作品を書こうかな？

と、思っています

あり？こっちの方が重要？

正月は色んなことがあった。しかしそれを言うと私は恥死する b y イリヤ

これは、正月、一月一日に起こった大ハプニング。

私の目の前には、ヴィヴィオ、なのはママ、フェイトママそして、。

この三人は、本来ここにはいない人。

私がこの世界に来たせいか、神のイタズラか

これから話すことは世界が変わり始める頃のお話

元旦、私達は朝日を見るべく第97管理外世界地球にやってきた
ここ海鳴の海に降り立った私達は、まだ薄暗い浜辺に謎の物体を発
見したのだった・・・！

「あれ？よく見ると人のような？」

と、フェイトママが言ったので今度は千里眼でよく見ることにした
ふむ・・・黒髪ロングヘアーの魅惑的なファッションのご婦人と、
9、10歳くらいの
・・・フェイトママ？

「どうしたの、イリヤ？」

「いや、二人いるみたいなんだけど一人は若い頃のフェイトママに
似ていて・・・」

もう一人の人は、黒いロングヘアーで魅惑的な服装だったよ」

「・・・」

ザッザッザッ

何か思いつめた表情でフェイトママが走っていく

「あ、フェイトちゃん！」

その後をなのはママが追っていく

「私達も行こう？ ヴィヴィオ」

「う、うん」

半分空気化していたヴィヴィオに声をかけ走り出す

「！」

「大丈夫ですか！！」

声を荒げてフェイトママは言う

なのはママの方を見ると信じられないって顔をしていた

「う、うゝん・・・」

黒髪の人起きそうだったので、私はヴィヴィオと金髪の少女に向かった

「母さん、プレシア母さん！！」

フェイトママが泣きながら叫ぶ

「フェ、フェイトちゃん、えとプレシアさん目を回して気絶してるよ……」

「へ？は、はわ……か、母さーん！？」

シリアスっぽい空気はどこかへ消えてしまった

「おゝい、大丈夫？」

「しっかりして下さい」

取り合えずこのフェイトママ似の子を起こそうかと
りあえずフェイトママの二の舞にならないように軽く肩を揺らす

「うゝん、ママ？」

どうやらまだ意識がはつきりしないようだ

「うにゅゅ」

ギュ

突然この少女が抱きついてきた！！

「あっ、何してるのー！」

ヴィヴィオが頬を膨らませて怒っている

「うゝん……あれ？母さんじゃ……ない？」

すると少女は顔を赤らめて・・・

ボンッ！！

キュ~~~~といいながら倒れてしまった

「ど、どうしようなのは~~~~!!?」

「とりあえず車のところまでもどろつよ・・・」

ここじゃ寒いしね~~~~

・
・
・

「「フェイト~~~~!!!」」

「母さ~~~~ん、アリシア~~~~!!!」

まあ、感動の再開かな?

プレシアテストロッサ

聞くところによると、P・T事件というのがあつて

色々あつて二人は虚数空間というところに落ちてしまった

しかし、二人がたどり着いたところは忘れ去られた都、アルハザード
だけどそこはお城のようなところだった

プレシアは、力を振り絞り宝物庫とある杖を見つけた

そして、その杖を使い自身の病を治しアリシアを蘇らせたらしい

そこで、4、5年暮らし食料も無くなってきたので（なぜか食べ物
は腐らないらしい）

転移魔法で、奇跡的に戻ってこれたらしい・・・

プレシアさん・・・何歳?女性に年齢を聞くのは野暮だけど

どっからどうみても20代後半にしか見えないよ・・・
と、聞いてみると

「あの杖を使ったら若返ったのよ」

謎ですな〜。 あつその杖貸してくれませんか？

「いいわよ」

どうもです〜、それでは、トレース・オン解析開始

アスクレーピオス（もしくはアスクレピオス）はアポローンとコロ
ーニスの子。コローニスはテッサリアのラピテース族の王プレギュ
アースの娘で、アポロンは一羽のカラスを使いとしてコローニスと
の連絡係にしていた。このカラスは言葉を話し、その羽は純白だっ
た。あるとき、カラスがコローニスの浮気を告げたために、怒った
アポローンはコローニスを矢で射殺した。このカラスの報告は道草
を食っていた言い訳に付いた嘘だったという説と、カラスがうつか
り者で早とちりをしたという説がある。いずれにしても、アポロー
ンはカラスを罰して言葉を取り上げ、白い羽を真っ黒に変えた。こ
のカラスの姿が現在のからす座である。一説には、からす座のすぐ
近くにコップ座があるにもかかわらず、そのくちばしは永遠にコッ
プの水に届かないという。コローニスは身ごもっていることを告げ
て死んだため、アポローンは胎児を救い出してケンタウロスの賢者
ケイローンに養育を託した。この胎児がアスクレーピオスである。

ケイローンのもとで育ったアスクレーピオスは、とくに医学に才能
を示し、師のケイローンさえ凌ぐほどであった。やがて独立したア
スクレーピオスは、イアーソン率いるアルゴ^{アルゴナウタイ}船探検隊にも参加
した。その医術の技はますます熟達し、ついに死者まで生き返らせ
ることができるようになった。アスクレーピオスはアテーナイ王デ
ーセウスの息子ヒッポリュトスを蘇らせたという。冥界の王ハーデ
ースは、自らの領域から死者が取り戻されていくのを“世界の秩序

（生老病死）を乱すもの”とゼウスに強く抗議した。ゼウスはこれを聞き入れ、雷霆をもってアスクレーピオスを撃ち殺した。
（ウィキペディア引用）

と、いうことはこれは「アスクレピオスの杖」・・・かな？

てか、最後のウィキペディア引用までが解析結果だなんて・・・
うーむ、確か死者蘇生には、f a t e 的魔法の「時間旅行」「平行世界の運営」「無の否定」

の三つが必要だったと思うけど・・・

「無の否定」はよくわからないし、「平行世界の運営」は、某宝石翁しか出来ないから、

「時間旅行」が一番近いかな

・・・もしかして、これ投影出来たら私も魔法使い？

ん？アスクレピオスの杖にヒビが・・・

ピキッパキッバラバラバラ

・・・壊れちった♪

正月は色んなことがあった。しかしそれを言つと私は恥死する b y i r i y a (後

野(もうすぐPVが5万突破で

ユニークが1万突破だ〜〜!!

イ・ミ(イエ〜〜〜〜イ

野(ええ〜これもこんな駄作を読んでいただけ

皆様のおかげです

イ(感想を書いてくれた、俊さん、k u s a r i さん、霞さん
ありがとうございます

ミ(話変わるけど前書きのアレって本当なの？

野(本当、アイデアはある。けどコッチ本編すら行つて

ないからどうしようか迷つてる

ちなみに時系列は、空白期〜s t s〜オリジナルだけど

空白期とオリジナルは消えると思う

イ(なんで？

野(私に文才がナイから、オリジナルの話なんて書けない

ミ(なるほど〜

野(主人公は多分人間じゃない

イ(ネタバレ発言禁止!!・・・

でも、人間じゃないつてするとデバイス？

野(違う

ミ(それじゃ、ガシエツト？

野(某優雅に生き残ろうみたく書けるわけがない

イ(うゝん、謎だねゝ

野（ちなみにヒロインはフェイト様

ミ（人間じゃないのに？

野（まあ、書いてからの楽しみってことで

イ（しょーがないか

野（なのは以外だったら「これはゾンビですか？」

とかで書きたい。あれ面白かったよ

ミ（世界観がかなり変わるね）

野（なのはの世界は、色んな次元世界あるでしょ？

その中のひとつにあってもいいと思う

イ（つまりは、コラボも出来るってこと？

野（まあ、そうなるな

ミ（あなたにコラボができるのが心配ね

野（うん、自分でもそう思った

あ、それとモ○ハン×なのはStSってのも書きたい

モン○ンは3rdの奴だけど

イ（作者はそれでどれくらい強いのか？モンハ○？

野（今ハンターランク5くらいだから、まあまああってここ

ミ（でも、友達に手伝ってもらってばかりじゃん

野（ぐ、それを言われると・・・

野（オマケでイリヤの無限の剣製
アンリミテッド・ブレイド・ワークス

の詠唱でも乗せます

I am the bone of my sword. (――
―― 体は剣で出来ている。)

Moon is my body, and fire is my Sun. 血潮は月で 心は太陽。

I have created over a thousand blades. 幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death. ただの一度も敗走はなく、
Nor known to Life. ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create many weapons. 彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

I have no regrets. This is the only pathならば、我が生涯に意味は要らず

I consist of "unlimited blade works". その身体はきつと"無限の剣"で出来ていた

5万PV突破&1万ユニーク突破!!ということは何をしても(r y P a r t

皆様、落ち着いて聞いてください

このお話は大変危険です

ネタバレ臭がもの凄いです

例の3文字の人の正体も分かってしまいます

今のうちにお引き・・・ああ、待て!いや待って下さい

お願いします

作者に出来ることなら何でもしますからorz

・・・えっ次のお話をとてつもなく甘いお話に・・・ですか?

分かりました、作者の全力全壊を見せましょう

それでは今のうちに犠牲者覧でも作っておきます

犠牲者1名

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

八月、絶賛の猛暑、

「暑い~~~~~」

「ヴィヴィオ、暑いって言うとな計暑くなるよ」

「そうですね、ヴィヴィオ。この暑さがしばらく続くのですからこれくらいでめげていては体がもちませんよ」

「それでも、暑いよ~~~」

ピンポ~~~~ン

「誰か来たみたいだね、私が出るよ」

そういつて私は、ふにゃ~~~~ってなっているヴィヴィオと、流石に暑いのか

うつすら汗を額に浮かべているイクスを横目に玄関に向かう

「どちら様ですか~~~~?」

「よう、イリヤ」

「イリヤ、こんにちは」

「スバルさん、ノーヴェ!!」

そこにいたのは、私やヴィヴィオの格闘技の師匠のノーヴェとスバルさん

「どうしたんですか、急に?」

「ああ、そのことなんだが。ヴィヴィオやイクスは、どうしてる?」

「あの二人は、この猛暑で暑がつてますよ?」

「なら話は早いな・・・海、行かねえか?」

「海、ですか?」

「うん、ちょうど家全員が休み取れたから海に行こうとしてたんだ」

「それで、暇だったからお前らも連れてってやるうつてなったんだ」

海か、大学の時は、一回しか行かなかったよ

「ついでに、なのはさんたちにも許可は取ってるよ」

あれ、もう行くこと決定してるの?

「・・・まあ、写真を取ってきてって頼まれたがな・・・」

明後日の方向を遠い瞳で見つめるノーヴェ・・・何があったんだ？

「アインハルトとミユは、イリヤが行くんなら行くって言ってるし
あの二人もか」

「コロナとリオは？」

「コロナは実家に帰って、リオは旅行らしい」

残念だな・・・ヴィヴィオ？何時の間に出て来たの？

「ねえ、イクス。もちろん行くよね？」

「ええ、勿論。負けませんよ」

何時の間に来たのやら、ヴィヴィオとイクス。

二人の間には火花が飛び散っていた・・・何故？

「それで、いつ行くんですか？」

「ん、ああ明日だ」

明日か？水着あったか・・・明日？

「うん、明日だよ」

「ヴィヴィオ！私とイクス、水着がない！買いに行くよ！！！」

「あ、私たちも着いて行っていていい？」

「・・・モチロン！！！」

「デパートin水着ショップ」

さあ、やって着ました水着ショップ。私は現在一人で水着探しです
え？何故一人でって？ヴィヴィオたちといたらいつの間にか女物の
水着を着させられるからだよ・・・

・・・水着、どれがいいか分かんない・・・

こ、こんなときは店員さんに聞くのが一番いいんだよ！

「すいませ〜ん、普通のトランクスタイプの水着がほしいんですが」

「あ、それでしたらこちらなんていかがですか？」

「ありがとうございます〜」

「いえいえ、こちらこそ。試着室はあちらです」
とりあえず、水着に着替えてつと

試着室のカーテンを開けてさっきの店員さんにみてもらう

「どうですか？」

「／／／／／．．．あ、すいません。とてもよく似合ってますよ」
どうしたんだろう、いきなり顔を赤くして？

「．．可愛すぎる．．．」

「あの、店員さん？これ、いくらですか？」

「こちらは、3980円です」

「じゃあ、これで」

「ちょうどですね、ありがとうございましたー」

ふと、今おもったのだが、男物に上なんてあったつけ？

「イリヤ．．．」

しばらく、イスに腰掛けて待っているとヴィヴィオの声がした

「あ、終わったの？」

「はい／／／／／」

顔がまだほんのり赤いイクス．．．何があつたのだろうか
スバルさんやノーヴェエは「眼福、眼福」とか言ってるし．．．

「着せ替え人形？」

「はうつ！いい、言わないで下さい／／／／／」

どうやら恥ずかしいようだ

「そつだ、イリヤ。明日9時ごろに行くからな」

「分かりました。それでは今日はこの辺で、ヴィヴィオ、イクス帰るよ」

「はい」「分かりました」

「楽しみにまつてろよ！」

「スバルさん、ノーヴェエ、また明日」

「うん」「おう」

今日は明日の準備をして、ちっちと寝よう

5万PV突破&1万ユニーク突破!!ということは何をしても(r y P a r t

野(本編にすら入ってないのに、俺何やってるんだろぅ・・・

イ(そういえばこの小説って微妙にバカテスとコラボしてるよね?

野(そだね、ノイちゃんとか、今回のだって原作3・5巻を微妙に
マネしてるし

ミ(それより、イクス出しちゃっていいの?

まだ、本編に出てないのに

野(いしまし、無いんだよ!この気分は!!

ミ(まあ、読者にどうおもられるか知らないけど
書くんなら真剣にやりなさい

野(分かってるよ

野(イリヤのハーレム(予定)人数は・・・1、2、3・・・
8人か

まったく、作者って全然ダメだね b y i r i y a ・ m i y u ・ u i u i o (前書き)

ほんと、すいません！

3ヶ月の間、ほったらかしで・・・

これからも、こんな状態になるかもしれないが
暖かい目で見守ってやってください

まったく、作者って全然ダメだね b yイリヤ・ミュ・ヴィヴィオ

I am the bone of my sword . (――
―― 体は剣で出来ている。)

Moon is my body , and fire is m
y Sun . 血潮は月で 心は太陽。

I have created over a thousand
blades . 幾千もの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death . ただの一
度も敗走はなく、

Not known to Life . ただの一
度も理解されない。

Have withstood pain to create
many weapons . 彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に
酔う。

I have no regrets . This is the
only path . ならば、我が生涯に意味は要らず

I consist of "unlimited blade
works" . その身体はきつと "無限の剣" で出来ていた

プレシアお婆ちゃん（笑）とアリシアが来て早一ヶ月。

戸籍やらうんたらかんたらは、滞りなく進んでいた

私の投影の練習や、固有結界の練習も大分進み、ほぼ完璧なレベルになってきた

そして、私はふと思った・・・かなり遅かったけど

「アーチャー、私普通に剣で攻撃とかしてたけど、あれって大丈夫だったの？」

たしかこの世界では、非殺傷設定というものがあり、それをしていない魔法は

人を殺してしまうのだ・・・まじでこわい

【それならば心配無い。私というデバイスを介すことで非殺傷設定とやらになる様にしてある】

よかった、てゆーか、先に言ってよね

2月の某日、まだ作者にとって忌まわしき14日は訪れていない

「すごく、大きい・・・」

これは、フェイトママだ

「うん・・・立派だね」

今度はなのはママ

「確かに・・・大きいわね」

これは、プレシアお婆ちゃん（笑）だ

「そんな読者が勘違いしそうな言い方はよそうよ・・・」

聞く人によつては3人の美人をはべらす鬼畜野郎のあれの感想みただ

この会話だけを聞いて分かってくれる人は、流石にいないと思うから
言っておこう・・・少し時間は遡るが・・・

まず、昨日の夜、私は、ヴィヴィオとロードワークに行っていた
大体、7時半に行つて、休憩したり、魔法の練習もしたりした
で、帰ってきたのが9時前だったと思う。

ちょっと遅くなったかなと、心の中で少し反省して

汗をかいたのを洗い流すために風呂に入ろうとしたんだけど
まあ、ここでヴィヴィオとひと悶着あったが、割愛しよう。

え、あついや、割愛させて下さい、お願いします・・・。

ゴホン、それは割愛して、ヴィヴィオは風呂に入っすぐ寝たから大体9時半には、寝てたと思う

私は、結界を張って、宝具の完全な投影の練習をしてた
それでも、10時半には寝たと思う

翌日~~~~~

んで、上に戻ると・・・え？わかんない？・・・それは、作者のせーだな

更新しないで、ほったらかしの・・・（ゴメンナサイ by 作者）
追加で言うと、なのはママたちが寝たのが11時半、アリシアは、
ヴィヴィオと一緒に寝てた

現在時刻は、8時42分、57秒・・・あ、43分になった

私達が寝て、起きたのが8時半、間の時間は、9時間・・・そうた
ったの九時間で・・・

家のまえに、超合金・・・ちがつ、超豪邸・・・微妙に違う・・・
大豪邸が建っていた

え、つと確か私の記憶では、昨日の夜には、住宅があっただよ・・・
・？

多分・・・

これは、気にはいけない・・・
きつと、世界が動いたんだ、そうに違いない・・・

そんなこんなで、引越してきた子と挨拶となりましたが
・・・うん、前世のあいつとそっくりだし、この世界に来てからも
会った気がする・・・

「初めまして、美遊・エーデルフェルトです」

「イリヤスフィー・・・イリヤ・テストロッサです」

「高町ヴィヴィオです」

「アリシア・テストロッサです」

ん？名前？ああ、プレシアお婆ちゃんが来たときに私はどっちの子か、って聞いて

ひと悶着あつて、結局、フェイトママが、「なのはには、ヴィヴィオがいるのに」（泣）

って泣き出しちゃって・・・まあ、嬉しかったけどネ？／／／／

「ねえミュさん」「ミュだけでいいわよ、私もイリヤって呼ぶから」
・ミュ去年の

クリスマスのときに会ってたりする？」

「ええ、あの時は本当に怖かったわ。イリヤには、感謝しきれないわ
《少しいいかしら、聞きたいことがあるの》」

突然、ミュからの念話が入った・・・もしかして

「うっん、普通のことをしたまでだよ《大体察しは付くけど・・・
どぞ》」

「あの日に何かあったの？」

「まあ、ちょっとね・・・」

「？」

内心、ちょっとではすまないことだけだと思ったせいか、笑顔が少し引きつる

そして、アリシアはまだ来ていなかったから頭に？マークを浮かべている

《あなたは、転生者なの・・・？》

・・・ふむ、やはり、あいつに間違いないかな？

「あ、私ジューズ取ってくるね」《・・・やっぱり、美遊か・・・》
「」

そういつて、部屋から出る

《久し振りね、咲・・・》

ドアを閉めるときにふつとミユの顔を見ると・・・まるで大切なモノを見つけられた
時のような笑顔をしていた

まったく、作者って全然ダメだね b yイリヤ・ミュ・ヴィヴィオ（後書き）

イ・ミ（遅い！！

T（すいません！

イ・ミ（何をやっていたの・・・？（怒

T（その・・・何といますか・・・

またモンハンにはまっていました・・・

イ・ミ（・・・これはお仕置きが必要だね

T（ごめんなさ～～い

イ・ミ（エクスカリバー約束された勝利の剣！！！！

T（イヤ～～～～！！！！

私が目指すのは、全ての人を救うこと b y i r i y a (前書き)

ああ、(〓。〓) 〓。 〓。ねむい・・・

私が目指すのは、全ての人を救うこと byイリヤ

例の超合金事件が去った後も、やはり事件は起こる

・・・事件の始まりを告げたのは、ヴィヴィオだった・・・

sideヴィヴィオ

そーいえば、まだ、イリヤもアリシアもまだ、あの子に会ってないよね？

新しく増えた家族のみんなと一緒に撮った写真を持って会いに行かないとね♪

sideイリヤ

そんなこんなで、今は聖王協会なところにいるイクスに会いに行くことになりました

ノーヴェ達に私のことで、あいさつに行くことも会ったせいか、ノーヴェたちも着いて来ることになりました
ちなみに、このときにチンクに「姉のことは、チンク姉と呼んでほしい／＼／＼」と言われた。

ために、につこり笑って「チンク姉」と言ったら、辺りはいきなり紅に染まったからビックリした

「ごきげんよう、イクス。

お加減良さそうだね？」

sideイクス

私は、暗い世界にいる。辺り一体が身体に纏わり付くように・・・
ただ不気味で・・・

少し前にこの中から抜け出せたけれど、もう、身体が動かない・・・
あの、私を救ってくれた蒼い少女、スバル、色んな話を話したヴィ
ヴィオ・・・あなた達には・・・もう、会えないの・・・？

悲しい、悲しい、嫌だ、嫌だ、嫌だ、会いたい、会いたい、会いたい、触れ合いたい、お話したい、一緒に歩きたい、一緒に……一緒に……一緒に居たい……

私がそう願った、瞬間、この暗い世界に一筋の光が差し込んできた・

sideイリヤ

「この子が、イクス……」

「うん、少し前に、とある事件があつてね……」

そういうと、スバルさんは、その事件について話してくれた

それは、マリアージュ事件

その事件のなか、イクスは覚醒し、スバルさんに救助された

そして、イクスは、機能不全起こし、永遠の眠りについた

たしか、イクスは1000年の時を休み、休みとはいえ、動いてきたのだ

経年劣化とでも言うのかな？

スバルさんは、悲しい顔をして、イクスを見ている。

ノーヴェも、みんなも・・・だから

「トレース・オン
投影開始」

「？」

だから、創る

私は、創る、魔法を・・・奇跡を起こせる杖を・・・

担い手なんか、関係無い。

引き金は強い願い、渴望。

代償は、私の魔力。

なら、この人なら・・・強い願い、すなわち、また会いたいという
渴望・・・

必ず、出来る・・・！

光の粒子に私は包まれ、そしてそれが全て消えるとき

そこには、アスケレヒオス奇跡を起こす祈りの杖があつた

「イリヤ・・・その杖は・・・？」

スバルさんやみんなが訝しげに私を見る

「スバルさん・・・イクスにまた会いたいですか？」

「え？」

「イクスともつと話したいですか？」

「・・・」

「イクスと・・・一緒にいたいですか？」

「うん、もっと話したい、うんと一緒にいたい、一緒に笑いたい、一緒に泣きたい

・・・時々、喧嘩もして、それで・・・色々なことをイクスと、みんなとしたい・・・」

途中、ぼろぼろと涙を流しだしたスバルさん

「なら、力を貸します」

「・・・私は、どうすればいいの？」

うつむいたまま、聞いてくる

「あなたが強く願えば、その願いがきつと叶う」

そう言って、スバルさんと一緒に杖を持つ

「心に願ってください、イクスとの日々を・・・」

「うん・・・うん！」

ドクン、ドクンと杖から、脈打つ鼓動が感じられる

そして、杖からは、さっきまで感じなかった膨大な魔力があふれ出る

「お、おい、大丈夫なのか？」

ノーヴェが心配そうに言うが

「心配しないで、きっと・・・ううん、絶対できるよ！」

スバルさんが元気な顔で、元気な声で言う

・・・魔力は満ちた、恐らく次に鼓動するときに最も大きく脈打つだろう

身体が、脳が、そして本能がそれを察した

そして、告げる。真の名前を

「
アスクレピオス
奇跡を起こす祈りの杖!!」

病室は、揺れ、そして黄金の光に包まれた

「つつ、まぶし〜」

一番早く目が回復したのはノーヴェだった

「まだちょっとくらくらするよ〜」

「一体どうなったのだ?」

「うつゝ、目が痛いっス〜」

みんなの目が回復してきて、そのまなざしはイクスの方へ向く

「.....」

しかし、目を閉じて静かに眠っているように見える

「これは、あれっすね。王子様のキスで目覚めるパターンっスよ」

「阿呆が、そんなわけ無かるっ」

「けど〜」

みんな、色々唸って考え出した

sideイクス

光は、私を包みこみ、そしてこの世界の闇を全て抜ってくれた
そして、急に身体が何かに引っ張られる感覚がした

そして、私は目覚めた

会話が聞こえる、どこか楽しそうな。それでいて不安そうな・・・

「じゃ、リヤ スして おうよ」

「え、 し!?!」

「えーっ! イ ずる よ〜」

良く聞こえないが、何か始まるような・・・

sideイリヤ

「それじゃ、イリヤにキスしてもらおうよ」

何故こういう結論に至ったか良く分からない

「えっ! どうし!?!」

突然、ノーヴェに口を押さえられビックリする

「えーっ! イクスするいよ〜」

なにがずるいのか良く分からない

「ほらほら、観念するするッスよ〜」

くっ! ここはもうキスするしかないのか!?!

「姉はそっつうのは、少し反対だな、うん／／／／」

よし、ナイスチンク姉！！

「でも、ウエンディの言うとおり、キスしないと起きないんだっ
ら・・・」

スバルさんのその目は、男はお前しかいないと投げかけてくる目だ
った

「~~~~／／／／分かった、するよ／／／すればいいんでしょ／
／／／／」

腹を決め、眠っているイクスに顔を近づける・・・き、緊張する／
／／／／

「ぶ~~~~ぶ~~~~」く、ファーストキスが・・・」

外野がなんかうるさい

「そ、それじゃ／／／／するよ／／／／」

そして、イクスの唇に自分の唇を重ねた

s i d e イクス

なにやら、眼前に存在感を感じますね？何なのでしょうか
私は、気になって目を開けようとした瞬間

唇に、なにか柔らかいものが当たる感触がした

「~~~~~！？／／／／／」

急なことにパニックになり、目を見開くと

そこには顔を真っ赤に染め上げ、私にキスしている美少女がいた

私が目指すのは、全ての人を救うこと　byイリヤ（後書き）

T（今日はイリヤしかいません!!

I（え）、作者と二人つきりか）←←←

T（なかなか、心刺さるお言葉ですこと・・・

あ、そーいやイリヤはこれが1stキスじゃありませんよ？

I（そだね、確か前世では美遊としたし・・・

この世界に来てからは、ヴィヴィオにされたしね（本編外）

T（うん、書いてないけど実は毎日ヴィヴィオにされてるんだよ、君？

I（え？そーなの!？

T（夜こっそりきて、そしてスパツとして帰ってくんだよ

I（し、知らなかった・・・

T（嘘だけだね（本当だけど

I（あ、嘘ついたね、喰らいないさい！約束された勝利の剣!!!
エクスカリバー

T（ちょ、それはヤメテーーーーー!!!!!!

前略 正式タイトルは季節をすっ飛ばす作者の妄想 Part 2 (前書き)

ぜ、全部でPart 4までする予定だぜ!!

前略 正式タイトルは季節をすっ飛ばす作者の妄想 Part 2

「それじゃ、全員いるか確認するか」

「まずは、私とノーヴェにギン姉」

「お父さんとチンクそれにディエチとウェンディ」

「ハはい（はい）（はいッス）」

「次は、ヴィヴィオにイクス、イリヤとアリシア」

「ハはい！（はい）」

アリシア来てたの？研究してたんじゃないかったっけ

「母さんが「この水着を着てイリヤを悩殺してきなさい」って」

プレシアお婆ちゃん？何を考えているのかな。・・・これはOH

ANA SHIの必要があるかな・・・

「最後に、ミユとアインハルト、それにお嬢だな」

「ハはい」

あれ？ルーラーもいたの？「いたわよ」

「それじゃ、そろそろ行くか」

現在時刻は9：15分でございます

ちよつと待て

・・・男って私とゲンヤさんだけ・・・？

〈移動中〉

へっ？移動中の話？みんな色んな事をしてたらしいよ

私とアリシア、ルールーは寝てたからよくわからないけど

ゲンヤさんは「最近の若いもんは・・・」と遠い目をしていて

ギンガさんは顔を真っ赤にして何も言わなかったし

スバルさんとノーヴェに聞くと「お前は^{イリヤ}大変だな（だね）・・・」

「とか言ってた

ヴィヴィオとイクスは、「次は負けない！！」とか張り切っていて

ミュはアイン（アインハルトのことです）に何かを教えていた・・・
教えるたびに

アインは顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしていた・・・何があつた？

チンク姉（チンクにこう呼んでと言われたらしいです）は「ま、負けた・・・」

とか言つて、落ち込んでいて
ディエチはそんなチンク姉を励ましていた

まあ、こんな感じかな？別に寝ているときに顔に何か柔らかいものがあつたりした
感触はあつた気がするけど、まあ気のせいだと思う
ちなみにアリシアとルールーは寝ているとき、ずっと私に抱きついて
いた

side 三人称みたいなもの（てか作者目線）
そして、イリヤ達は海へと降り立った……！！！！
そこは、リア充の宝庫（彼女ほしい……）、犯罪者の巢窟（む、
これは事件の香りだニヤ！）、

亀がいじめられそれを助けたら龍宮城まで拉致など様々なイベントがある

しかし、そのイベントは私はスルーできない！！！（最後除く）
やはり、リア充のキヤツキヤウフフを書かなければならない！！！！
さあ、イリヤよ、この試練・・・君に耐えられるかな・・・？

sideイリヤ

なんか電波が飛んで来てたけど、シカトの方向でいいのかな？
さて、作者の妄想ではみんなの水着姿を文字に表すことは出来ない
ので

各自、脳内補完しといてください

「あつという間にみんなが着替えられたらいいのにな・・・」

「イリヤ」一緒に着替えよ？」

と、ヴィヴィオ

「ほらほら、恥ずかしがらないで。」

こちらは、アリシア

「今のうちに見といたほうが特だよ？」

「イリヤ、私の裸に興味が無いのですか・・・？」

ちょっとルールとイクスが問題発言

「あう、あうう／／／／」

あうあう語の習得に成功したアイン

「ハア、あなた達には恥じらいつてもものがないの・・・？」

最後にミユ・・・あなたとアインだけが私の心のオアシスです・・・

「・・・私もしかしたら」

・・・悪魔でした・・・

そんなこんなでみんな着替え終わり・・・
各自でグループに分かれて行動することになりました

グループ？ゲンヤさん、ギンガさん、スバルさん、

グループ？ノーヴェ、チンク姉、ヴィヴィオ、イクス、アリシア

グループ？私、ミュ、アイン、ルールー、ディエチ、ウェンディ

となりました

そして、次回……いよいよ事件が……！

前略 正式タイトルは季節をすっ飛ばす作者の妄想 Part 2 (後書き)

雑談コーナーは今回は作者が怪我（軽い奴ですけど・・・）
をしているので、休みです

本編に関係なし、これは乱入フラグ（前書き）

やっちゃった

自重という言葉など私の辞書に無い！！！！

本編に関係なし、これは乱入フラグ

15歳になった私、イリヤは管理局で働いています

そして、今日はロストロギアの確保、封印の任務です

そんなこんなで第98管理外世界「セカンド・アース」にて
任務に來ています

「ふう、これで全部かな？」

台詞から分かるように、このロストロギア、通称「パラレル」は全部で6個あります

割と探すのに苦労したのは言うまでも無い

「ミュ〜〜〜終わったよ〜〜〜」

私は器用じゃないから、とゆーか封印が出来ないからミュにやってもらいます

「ちょっと、危ないじゃない!!??」

ピカッ!!!!

あれ？パラレルが光だしたぞ？

「　　っ!!!!」

ミュが何かを必死で叫んでいるが全然聞こえない・・・

ちょ、これはやばいんじゃない・・・？

たしか、このロストロギアは平行世界に行けるという噂・・・

それ、どんな魔法だよwwwって突っ込んだのは今は昔

そんなこんなで光はどんどん大きくなっていき・・・私を飲み込んだ

「気がついたら、亀甲縛り・・・これどんな苦痛？」

「お、束姉。起きたぜ」

「起きたんだね」なら早速実験だ」

なな、なんなんだこの二人は・・・？

ここはどこかの研究所？

「とまどってるね」なら説明しよう！」

話を聞くと二人は世界中から逃げ回ってるらしい

そして、この研究所「我輩は猫である」（名前はまだ無い）にて潜伏中・・・

そんな時、私が朝この研究所の前で爆睡していたらしい・・・
なんとまあ・・・

「それで、実験ってなんですか？」

「イリヤです、イリヤ・テストロッサ」

「OK」いーちゃんこれに乗って見てよ？」
いーちゃんって・・・まあ乗ってみよう

そこにあつたのは、紅と黒を主体としたIS・・・「アーチャー」
があつた

え、男って乗れないんじゃないの・・・？

本編に関係なし、これは乱入フラグ（後書き）

イ（ん、？何々・・・作者が最近書き始めたISの小説に殴りこみ！！

イリヤは無事になのはの世界に帰ることが出来るのだろうか！？
どういうこと？

T（俺www自重www

イ（つかえないな〜）

T（まあ、こつちの物語にはまったく関係無いIFの物語だから
イ（あつちの方に出るんでしょ？

T（そうそう、いや〜これで面白くなるよwww

イ（・・・まあ、読者に引かれたらそれまでか・・・

T（・・・！！！！

ちよ、どづしてこーなるのー!? b y i r i y a (前書き)

色々進展する、やも

ちょ、どうしてこーなるの！？ byイリヤ

「好きです。死ぬまで一緒にいて下さい」

ちょ、イキナリ告白されちゃった！？

え、どうしたらいいの！助けて！ドラ○もん！

side ヴィヴィオ

・・・何をしているのかな？イクス！

イリヤにキスされたのは、まだ許すよ・・・私もしてるしね・・・
だけど、その後抱きついて、さらに告白までするなんて・・・
そんなにも私を怒らせたのかな？あはは！！（恐

・・・てへっ♪

再びsideイリヤ

まあ、色々あって・・・イクスはウチに住むことになりました
なのはママが乱入して、イクスの取り合いになって「・・・少し頭、
冷やそうか・・・」って

言ったときは超怖かった・・・ゲイ・ジャルグ破魔の紅薔薇の投影が遅れていたら・

・

とにかく、最終的にはイクス本人に聞いたら「嫁と一緒に住まずし
てなにか結婚といいますか!!!」

と言った。ちょ、私は嫁ですか・・・？てか何時結婚した・・・
(作者的にはどんなラウラだwww)

あと、スバルさん達が泣いていた・・・ご愁傷様です

なのはママの次に怖かったのがヴィヴィオだった件については

なにも言うべきでないと本能が悟った

とにかくにも、これでやっと本編に行けるぜ〜と喜んでいた作
者がいた

うん、長かったね。ここまで・・・最後に「俺達の戦いは終わらな
い!!」と

でも言えば、まるで打ち切りみたいだね・・・けっしてフラグじゃ
ないよ？ええ

イリヤはこの時まだ知らなかった。

イクスが、兵器ではなく完全な人の身体に変わっている事に・・・

アスクレピオス
奇跡を起こす祈りの杖が、
剣と共鳴していることに・・・

3月、
もつすぐ春の訪れを感じさせるそんな時期になるのはママは言
った

「イリヤも、イクスも学校に行きたいかな？」

「私は行きたいです、なのはお母様」

どうやらイクスは行きたがってるらしい・・・

ヴィヴィオも私に行ってほしいと眼で訴えているけど・・・けど・・・

・

正直に言えば私は怖い、学校が、じゃなくてその生徒が・・・

また、昔みたいにみんなに無視されるんじゃないかって

ヴィヴィオはそれとなく聞いてみると「そんな事無い!!」って断

言してた・・・

それでも、初等科と中等科では違っただろし・・・

・・・ミユはどうするんだろう・・・

ちなみに、アリシアはもう学校に行ってるみたい。ヴィヴィオと一緒に

多分、次の日

ヴィヴィオはSt・ヒルデ魔法学院に行き、まだ私は行く事になつてないから

ミュの家に行く事にした

「あら、ミュなら学院よ？」

なん・・・だと・・・!!!

「ウソよ」

よかった、いたんだミュ・・・

「ママ、勝手にウソをつかないでね」

「どうしようかしらね〜？」

ビビッたよ、本当・・・私また一人だと思っちゃった
すると、ミュが私の耳に囁いてきた

「昔、言ったでしょ？私はあなたとずっと一緒にいるって・・・」

そうだった・・・前の世界で私達はそう約束したんだ
そして、それは今も続いている・・・

「今思えば、あれってもろ告白だよね・・・」

「あら、私はそう思っていたけど？」

・・・女という生き物は怖いです・・・皆さん

「で、結局どうするの、ミユは？」

「どうって、私的には楽しそうよ。あの学院・・・けどあなたは正直どうなの？」

「・・・まだ、怖いんだ・・・けど変わらないといけない気がする」

余談だけど、「学院行かなかったら管理局に来ない？」って脅さ・・・
・ゲフン、ゲフン！！！！
言われてるんだ・・・

「とりあえず、今度一緒に学園に行ってみましょうよ、それから決めない？」

「うん、そうだね。明日・・・行ってみようか」

そーゆーわけで、明日学院に行く事が決まりました・・・

ちょ、ぶづしてごーなるのー!? b y i r i y a (後書き)

今日はあとがきオヤスミです

11万PV&2万ユニーク達成祝い！！イリヤが主人公でエロゲをすると・

後悔？なんだねそれは？おいしいのかい？

それより、11万PVと2万ユニーク達成です！！！

ひとえに、読者様のおかげです！！！

ありがとうございます！！！！！！！！

11万PV&2万ユニーク達成祝い！！イリヤが主人公でエロゲをすると・

正ヒロインルート（ミュ、ヴィヴィオ、アイン、イクス、アリシア）

準ヒロインルート（ルーテシア、リオ、コロナ、チンク）

同年ルート（ミュ、アイン、ルーテシア）

年下ルート（ヴィヴィオ、イクス、リオ、コロナ、アリシア）

王様ルート（ヴィヴィオ、アイン、イクス）

ミュルート（純）

分岐無し

ヴィヴィオルート（純）

分岐 ヴィヴィオヤンデレルート

アインルート（純）

分岐 アイン&ヴィヴィオルート

イクスルート（純）

分岐 イクス&スバル&ティアナルート

アリシアルート（純）

分岐 アリシア&フェイトルート、別名姉妹丼ルート

リオ&コロナルート（純）

分岐無し

ルーテシアルート（純）

分岐 ルーテシア&メガーヌルート、別名親子丼ルート

チンクルート（純）

分岐 チンク&ノーヴェルート

スバルルート（純）

分岐 スバル&ギンガルート、別名腹ペコルート

ティアナルート（純）、別名ツンデレルート

分岐 ティアナ&スバルルート

禁断ルート1

なのは&フェイトルート

分岐 なのは&フェイト&プレシアルート

禁断ルート2

高町家ルート（なのは、ヴィヴィオ、イクス）

禁断ルート3

テストロッサ家ルート（フェイト、アリシア、プレシア）

禁断ルート4

シグナムルート、別名師弟ルート

禁断ルート5

エリオルート、別名BLEルート

禁断ルート6

キヤロルート、別名NTRルート

禁断ルート7

高町家ルート（ヴィヴィオ、イクス、なのは、フェイト）

禁断ルート8

ナカジマ家ルート（スバル、ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウエンディ）

禁断ルート9

学園ハーレムルート（ミュ、ヴィヴィオ、アイン、イクス、アリシア、リオ、コロナ）

禁断ルート10

修道院ルート（セイン、オットー、デード）

超禁断ルート1

超ハーレムルート（ミュ、ヴィヴィオ、アイン、イクス、アリシア、リオ、コロナ、ルーテシア

スバル、ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウエンディ、セイン、オットー

デード、なのは、フェイト、プレシア、メガ
ーヌ、シグナム）

超禁断ルート2

超ハーレムルート改造編（ミュ、ヴィヴィオ、アイン、イクス、アリシア、リオ、コロナ、

ルーテシア、スバル、ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウエンディ、セイン、

オットー、デイド、なのは、フェイト、プレシア、メガーヌ、シグナム、

ここから追加　キャロ、エリオ（性転換）、はやて、リインフォー
ス？

リイン？、シャマル、ヴィータ、アギト、
インターミドル出場者（女性）、

先に言っておくと、これはほぼ100パーセント実現不可能です。
過度な期待はなさらないで下さい

超禁断ルート3

超ヤンデレルート（ミュ、ヴィヴィオ、アイン、イクス、アリシア、
リオ、コロナ、ルーテシア

スバル、ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウ
エンディ、なのは、フェイト）

超禁断ルート4

Unlimited Blade Worksルート　劇場版に殴
りこみ！？

このルートが現在の指針になっております。オリキャラが出てくる
かも

なんか、電波を受信した。それしか言い用が無い

11万PV&2万ユニーク達成祝い！！イリヤが主人公でエロゲをすると・

T（ふっふっふ・・・どのルートでイリヤを困らせようか・・・

やはり、読者様に聞くしかあるまい・・・

と、言うわけでこのなかのどれかのルートで書いてみたいと思います

感想にでも書いていただければ作者が暇な時書きます

ただ、流石に18禁とBLは書けないのでヨロシクお願いします

学校の日々 決して school days じゃないわよ by 三

あれはグロすぎよ・・・っと、いけない本編が始まってたわ

イリヤが来た翌日、ヴィヴィオとアリシアに案内されながら私達は
St・ヒルデ魔法学院にやって来たわ

それにしても・・・また中学生からやり直すなんてどんな苦痛よ・・・

まあ、魔法の勉強が殆どだから面白いとは思うけど・・・
たしか、パンフレットによると・・・

「最高レベルの応用学！！！！将来に役立つスキルを伝授！！！！」

「聖王教会系のミッションスクールでお子様のお行儀も完璧に！！！！」

などなど・・・面倒臭いわね、この学院

そういえば・・・忘れていたわ、イクスもいたのよ・・・

とりあえず、私達は職員室に向かったわ。そこにはシスターシャツ
八がいて

私とイリヤの案内をしてくれることになったの

イクスはヴィヴィオとアリシアに案内されることになったわ

とりあえず、第6学年つまり、同級生を見に行くことにしたわ

1 限目} History }

余談だけど、Historyつまり歴史の覚え方はまず二つに分けるの

「his」+「story」にわけて訳すと「彼の」+「物語」だけど、性別が不確定の時は

heやhisを使うから「彼、彼女の」+「物語」となるわけ

そして、歴史上の人物は性別問わずだから「his」、そんな人達の物語「story」だから

つなげて「history」なの。ちなみにこれは作者が勝手に考えたものだから

間違っている可能性は大よ。正直、ウザイくらいだわ(ダメッテロ)

まあ、こんな話ドブに捨てといて(オイ)

授業を覗いて見ましょう(ナンカエロイナ)

.....本当、ウザいわね.....

どうやら授業では古代ベルカについて1時間だけ勉強してるみたいね
情報が少なすぎて、それだけで終わってしまうんでしょう

・ ・ ・ なんか一人だけ物凄く燃えている子がいるんだけど ・ ・ ・
綺麗な碧銀のロングヘアに ・ ・ ・ あれはオッドアイかしら、ヴィ
ヴィオとはまた違う色の ・ ・ ・
それに、誰もが見とれる美貌に華奢な体躯 ・ ・ ・ まるで ・ ・ ・ そう ・
・ ・

「エロゲ」の攻略対象みたいな娘ね

それにしても、どうしてあんなにも燃えているのかしら・・・？
まあ、どうでもいいか。もし、一緒のクラスになれたら聞いてみよう

2次gゲフンゲフン！！・・・2限目→体育→

言うなれば「Physical」ね・・・ミッド語は英語に近いから楽だわ・・・

今度は中等科の1年に来てみたわ、私達がここに入るなら1つ上の先輩になるわけね

けど・・・あんまり凄い人はいないみたいね・・・

イリヤも、なんだかつまらなさそうだし・・・

これ以上ここにいるのも面白くないわ・・・そうだ、シスターシャツ
ハとイリヤの模擬戦でもすれば、

お昼まで時間が埋まりそうね。私はやんないけど

3時限目　┌魔導学┐

あら、どうやらさっきの人達は魔導学をするみたいね。イリヤ、覗いていくわよ

10分後・・・

成る程・・・

さらに20分後・・・

ふむふむ・・・

さらにさらに30分後・・・

┌授業終了┐

ん、なにイリヤ？お腹すいたって？もう少し我慢しなさい
お昼までまだ一時間もあるのよ、残りの一時間は身体を動かして紛らわせなさい
そうね・・・

「シャッハさん！イリヤと模擬戦してくれませんか？」

「模擬戦、ですか・・・？ちょっと待ってください・・・はい、分かりました。」

ちょうどこの一時間は空いているそうなのでぜひ、やりましょう」

あら、この人も戦闘^{バトル}ジャンキー^{ジャンキー}なのかしら？
まあ、気楽にやりなさい、イリヤ。

そろそろ始まるみたいね
ちなみに今回は、観客者として私と、さっき見た初等科6年の人達がいるわ
あ、さっきのエロゲの攻^{アタ}り^マり^キゲ^キファンゲ^ンファン！！・・・可愛い娘がいるわね・・・

ルールは、至ってシンプル。どちらかが根を上げるまで・・・だけど
一応怪我しないようににはする、無理をしない、魔法は強化系のみ、
イリヤは干将・莫耶のみ
って感じよ、分かった？

お互い、バリアジャケットを纏って向かい合ってるわ

・・・イリヤが動いた、アレは・・・魔力放出を使ってるわね・・・
一応反則よ・・・

かなり速いけど、まだ半分も本気を出していないわね
勢いをつけてからの夫婦剣の振り下ろしの攻撃ね

シャッハさんは・・・おお、ぎりぎり受け止めた。流石に驚いてい
るわね

火花が散り、幾度と繰り返される剣の乱舞・・・それを受け止める
シャッハさん・・・

ほら、あの子達、ドン引きしてるじゃないの・・・どれだけ普段は
加減してるの？

あら、イリヤが隙を見せ始めたわ。あれはフェイクね
その後の攻撃に繋げるんですね、分かります・・・いけない、病気
にかかったわ

シャッハさんが隙について攻撃したのを・・・イリヤが干将で止める
また隙をついても今度も止められる。これじゃ無限ループね

おや？イリヤの様子が・・・じゃないわ、これじゃまだ病気にかか
ってるわ

ガキン！ ザシュツ！

イリヤがシャッハさんのトンファー？を1つぶっ飛ばしたわね（最
後の効果音は地面にry）

・・・生徒達、啞然・・・あの熱血っ娘は食い入るように見てるわね
とりあえず、ここで試合終了ね・・・

キュ~~~~、バタンツ

あらっ！？イリヤが倒れちゃった！！！？いけない、あの子お腹す
いてたんだわ・・・

そんなこんなでグダグダになってしまった模擬戦・・・
とりあえず、シヨックをうけてるシャツ八さんをどうにかして元に
戻してイリヤを運びましょう

く昼休みく sideイリヤ

私、復活~~~~！！いやく正直どうなるかと思ったよ
それにしてもここの学食おいしいねく

「・・・見て、あの子・・・可愛くない？」

「・・・うん、可愛い。私レズになるかもしれない」

「・・・ところがどっこい、あの子男の娘らしいわよ・・・」

「・・・本当！！??」

「・・・しっ！声が大きい！！シスターシャツ八は・・・いないわ
ね」

「え、シスターシャツ八がいたの・・・？」

「今はいないわ、よかったわね。あの娘シスターシャツ八の知り合
いみたいよ」

「危なかったわ・・・」

今はデザートを食べてますく（ちなみにラーメン3杯、チャーハン

2杯、酢豚3人前、ギョーザ5人前

を食べています。なぜ中華かと言うとちょうど中華が安かったみたいでし)

普段はここまで食べないんだけど、限界まで達するとなんだかいっぱいた食べちゃうんだよね

「
♪」

「あんた、よく入るわね・・・」

「ん♪」

「セイバーレベルには達しないからまだいい方よね・・・」

とまあ、こんな感じで昼食を食べてます
すると、そこに・・・

「あ、あの少しよろしいですか・・・？」

「ん〜？」

そこにいたのは・・・確か、初等科の6年の子だったかな？
お腹すいてたからあんまり覚えてないや

「アインハルト・ストラトスと言います、シスターシャッハに聞いてここに来ました

私と同じ年だと聞いております。あなたはどこでそんなに強く
なったのですか・・・？」

おう、急だなオイ。強さ・・・か。所詮この力は借り物。

さっきの戦いでは干将・莫耶を使ったけど、アーチャーの戦いを真
似ただけ・・・私の強さで無い

「エミヤの投影魔術は”成長に至る経験に共感し、蓄積された年月を
再現する”

つまり、投影した武器の扱い方をある程度知っているという事。
これならいくら初めての武器とはいえ扱える。けど私が投影すると
何故か

ほぼ100%武器の扱い方が分かるんだけど・・・なんで？

根本的な部分では微妙に違うが、殆ど私の投影はそれに準じている
ちなみに違うところは宝石なども投影する事が出来ることや、概念
を有した剣を造ること

そして、最も違う点は「神造兵器」を投影できること

最後に關してはアイツの悪戯だよね・・・悪戯じゃ済まないけれど・
・

「私は決して強く無いよ、剣を持ってやっと少しだけ強くなれる」

私自身が強くなるわけでは無い、けれどあの英雄の力は間違いなく
完成されている

いつかそれを自分のモノに出来た時、私はやっと強くなれる

具体的には、無限の剣製をデバイスアンリミテッド・ブレイド・ワークスの力を借りずに
展開、維持をする事。

もう一つは今まで挑戦はしてきたけど必ず失敗してきた・・・

「乖離剣エア」の投影

宝具アヴァロンのランクは全て遠き理想郷に並ぶEXランク・・・

最強の剣・・・ギルガメッシュの宝具・・・

それが投影出来れば、私は強くなれると思う

「あなたは「逆に聞くけど、どうしてもあなたは私が強いと思うの？」
・・・シスターシャツハに勝ったからです」

「強さはそんな簡単な事じゃ決まらないよ、お互い本気は出して無
かったんだし」

私と英霊エミヤが戦えば私は負けるだろう、セイバーの直感をもっ
てしても

宝具を使ったとしても・・・

「難しい話かな？・・・一ついえる事は」

「なんでしょうか・・・？」

「ねえ、ミユ私この学院に行きたいな・・・」

「奇遇ね私もよ」

「おもしろそうだし、それに」

「こんな可愛い娘もいるんだしね？」

「／／／／！！！！？」

突然、顔を紅くしたアインハルトさんを見て私は首をかしげた

学校の日々 決してs c h o o l d a y sじゃないわよ b y ミユ (後書き)

T (イリヤの「 「の台詞は各自脳内補完してください
!!」

作者には名言を考えられません!!!

I (自信満々で言う事がないでしょ・・・

M (それより、やっとアインハルトが出てきたわね・・・

T (アインハルト本当可愛い、F2OCさんのアインハルト特に可
愛い

T (今、考え中なんだけどアインをイリヤハーレムに入れないルー
トが

あるんだけど・・・どうしよう?それが無性に書きたいな・・・

GENSAKU始動!!ああ、長かった今日までの日々 BYT W i c

私達は「ソレスタルビーング」

これより、武力による原作介入を行う!!!（もうすでにしちゃってる件）

GENSAKU始動!! ああ、長かった今日までの日々 BYTWIC

次元の海を中心世界

『ミッドチルダ』

都市型テロ

『JS事件』の発生と解決からは

すでに4年が経過して

対処に当たった部隊

『機動六課』もすでに解散

そして機動六課の戦術の切り札

エース・オブ・エース

高町なのは一等空尉も

現在はその翼をひととき休めて

育ち行くは新たな世代

これはかつての空のエース、高町なのはの一人娘にして

St・ヒルデ魔法学園初等科4年生

高町ヴィヴィオの鮮烈な物語

ヴィヴィット

魔法少女リリカルなのはVivid

リリカル・マジカル、始まります

「つてのを考えたんだけど、どう？」

「りりかる・まじかる」

「いやゝ！ママの黒歴史をいじらないでゝゝ！」

「あの頃のなのは可愛かったなゝゝ」

・・・始まります

わたし、高町ヴィヴィオはミッドチルダ在住の魔法学院初等科4年

「ヴィヴィオ、イクス、アリシア、今日は始業式だけでしょ？」

「そだよー」

「帰りに少し寄り道してくけどね」

「少し遅れますがよろしいですかなのはお母様？」

イクスとアリシアは私と同じ初等科の4年生、本当はもう1人いるんだけど

転校生だから早く行っちゃった・・・というより、ミユさんと一緒に行きたかっただけかな・・・
本当は一緒に行きたかったけど・・・

「全然かまわないよ、今日はママもちよつと早く帰ってこられるから
晩御飯は4年生進級と転校のお祝いモードにしようか？」

『公務員』のママ達と一緒に私を含め7人で住んでいます
ブレシアお婆ちゃんとは地下室をイリヤが造ってそこで研究をしています

ここだけの話、実はなのはママとフェイトママが結婚しましたー！
！！

どうやら、ミッドチルダでは同姓婚が認められているそうで・・・
と、話が逸れてしまいました

「いいねー」

「やったー」

「ありがとうございます、なのはお母様」

「さて、それじゃ」

「うん（はい）」

「行つてきまゝす！」

全員でポンツとハイタッチをして学院に向かいます
みんな結構仲良しです。たまにケンカもするけどね

「イリヤとミユちゃんにも言っておかないとね・・・」

S t ・ヒルデ魔法学院 初等科・中等科棟

「おはよー」

「ごきげんよう」

はい、こちらS t ・ヒルデ魔法学院の生徒用の校門です
この学院は初等科と中等科が一緒になっているのでたくさんの生徒で溢れかえっています

「ヴィヴィオ、アリシア、イクス！」

玄関に着くと、私達の友達の元気な声が聞こえてきました

「ごきげんよう、ヴィヴィオ、アリシア、イクス」
「「「コロナ、リオ！」」」

長い髪をツインテールにしてるのがコロナで、髪を中心に大きなリボンをしているのがリオです
2人とも私達の大切なお友達です

「あれ、イリヤさんはいないの？」

「確かに、それにミユ先輩も・・・」

「2人は多分一緒に行きたかったんじゃないかな・・・？」

なんだか2人は最近こそそとしてるし、もしかして付き合ってる
とか！！??

「ど、どうしょー!？」

「ヴィヴィオ、それはないから」

と、アリシアに言われて意識を取り戻す

「そ、そうだよね！ありえないよね!!」

イリヤはみんなの共有財産です。独り占めはダメなんです!!

・・・この瞬間、くしゃみを連発した銀髪の少年がいたとか、
なんか

「な〜んだイリヤさんいないんだ」

「残念です、お会いしたかったのに・・・」

ちなみに、ここにいるみんなはイリヤがだーっっ好きです!!
likeじゃありませんloveです

「あ、クラス分けどうだった？」

アリシアが言った事に「あっ」とコロナとリオが言つと・・・

「ふふーん、なんと全員・・・」

「一緒のクラスですー!!」

「ああ、私の台詞が!!」

なにあとまあれ、全員一緒になれたので嬉しいかぎりです！

・・・その後でやったハイタッチでくすくす笑われたのはご愛嬌ですよね・・・？

GENSAKU始動!! ああ、長かった今日までの日々

by Twicc

T（やっと、原作だぜ〜〜!!!）

イ（長かったね〜）

ミ（あんたにしてはよく頑張った方ね

T（作者は現状、コミックスで書いておりますが

手元には2巻までしかありません、申し訳無い!!）

イ（まあ、インターネットで買えるからいいんじゃない？

ミ（けど、あんたもうすぐ修学旅行じゃない、

それにその後には中間試験だし、すぐに部活は最後の大会よ？

あんたはそれに加え受験生よ・・・大丈夫なの？

T（多分大丈夫さ!!）

イ（まあ、パズルしてる余裕があるからね〜）

T（ギクッ!!）

始業式とかの校長のあいさつって超長いよね b y i r i y a (前書き)

こゝこれで安心して修学旅行に行ける・・・！

始業式とかの校長のあいさつって超長いよね b y i r i y a

「…………であるからして」

『……………』

30分経過……

「…………そもそも…………」

『……………』

さらに30分経過……

「やはり……………」

『……………（長すぎだろ!!!）』

それから、30分後……

「や、やっと終わった…………」

「あのハゲ野郎、何時間話すつもりよ。他の先生が止めなかったら
昼越してたんじゃない？」

「ありえるね…………」

「…………にしても周りの視線が凄いわね…………」

「そうなの？」

「まったくこれだからこの子は…………」とミユが呟く…………どうい
うことだろ？

よく分かんないけどやっぱりミュが注目されてるんだろっね
そして今、始業式が終わったところでなのはママから電波・・・も
とい念話を受信したところですよ

内容は「（晩御飯はミュちゃんと一緒にパーティーをするよ！
料理はフェイトちゃんとルヴィアさん（ミュのお母さん）とたくさん
作るからね！）」
なるほど、なるほど。

「ミュ！今日、一緒にパーティーするって！！」

「あら、そうなの？もちろん、イリヤも作るんでしょ？」

どうなんだろう、一応祝われる立場だけどこっちも感謝を込めて料理
を作るべきか・・・

まあ、デザートぐらいかな？なのはママやルヴィアさんも
いっぱい作るって言ってたし

「微妙だね〜、まあ、デザートぐらいは作るうかって思ってる」
「いいわね、何を作るの？」

「ママ達にはチョコレートケーキで、私達はショートケーキ、
ヴィヴィオ達にはプリンにしようかな」

「それじゃ、早く材料を買いに行かないとね・・・そうだ一緒に作
りましょイリヤ」

「うん、じゃ連絡入れてショッピングに行こうね」

それから楽しいパーティも終わって・・・

『ご馳走様でしたー！』

「イリヤ、デザートおいしかったよ！」

「本当、イリヤちゃんは料理が上手ね。ミュ、ほしいのなら今のうちよ」

「お、お母さん！なに言ってるの！！！！／／／／／」

おや、ミュが動転してる・・・珍しいね

ふと、両腕に誰かが抱きついてきた・・・ヴィヴィオとアリシアとイクスだった

「！！イリヤは私のだよ（です）！！！！」！！！！

えっ、私ってそんな扱い？

「あら、それじゃ誰がイリヤちゃんのハートを射止めるか・・・競争ね」

何を競うんだろうね？まあ、とりあえず

「ミュ、魔法の練習に行こー」

「「「!」」」」

「ええ、いいわよ」

とりあえず、今日も練習だね

「私達は先に行くわね」

「ま、待つて! 私も行く〜!」

「抜け駆けは許さないよ〜〜!」

「朝、昼と一緒にいたのならイリヤを貸してください!!」

と、ヴィヴィオ達が追いかけてくるが・・・とゆうか私はモノか!!

「まあ、待つて。ヴィヴィオ、アリシア、イクス。渡したいモノがあるから・・・」

以前からまったく台詞の無かったプレシアお婆ちゃんが
眼を怪しく光らしながらヴィヴィオ達に近づいていく
・・・もしかして、何かの発明品が出来たのかな・・・

「ちょ、ママ!? 怖いからやめて!!??」

「お婆ちゃん!? 落ち着いて!?!」

「ミユ、私達は先に行こう!!」

「うん、そうね。早く行きましょう」

「あ! 待つてくだ「待つのはあなたよイクス」・・・はい」

こ、怖い・・・早く行こう!! 魔力放出は全開で!!!

おや？ノーヴェから通信だ・・・何々・・・今すぐ家に来れるか？
・

「ミユ〜、スバルさんに呼ばれたんだけど一緒に行く〜？」
「そうねあの子達には悪いけど行きましよう」

私達がこんな会話をしているとき、家の庭でなんか光ってたのが見えただけ

多分、プレシアお婆ちゃんの発明品のせいだろう・・・
ちなみにスバルさんの家に着いた時、どっから「いーい
！！！！！」

って聞いた事のある声が聞こえてきたけど・・・気のせいだね？

ナカジマ家にて〜

「「こんばんわ〜」」

「お、来たな。早く来いよ」

ノーヴェにリビングに案内される途中でミュが

「あの、私も来てしまったのですがよかったですか？」

「ああ、気にすんな。そっちの方が好都合だったし」

「ありがとうございます」

うん、やっぱりミュは何と言うか礼儀正しいかな？

「急にどうしたんですか？」

「まあ、詳しい事はリビングに着いてから言っぜ」

そう言っで、リビングに入るとチンク姉とウエンディ、ディエチがいた

「「こんばんわ〜」」

「こんばんわッス〜」

「ようこそ〜」

「おお、イリヤ。姉に会いに来てくれたのか？」

「？ちがいますよ」

私が言うと、チンク姉はシュンっとなつて「そ、そうか・・・」と呟いた

どうしたんだろう、一体？

「流石スルー王子だね」

「そうッスね〜一筋縄ではいかなさそうッス。ミユも大変でしょ？」

「はい。並大抵の事は殆どスルーしますね」

う〜ん、私何か悪い事でもしたのかな〜

「おい、ギン姉からも通信来てるぞ」

「ノーヴェー！早く言つてよ！！」

「そうッス、そうッス！！」

「いや、お前等をいくら呼んでも返事が無かったからさ」

「姉は・・・もうダメだ」

「あの、チンク姉。ファイト？」

「うん、チンク姉がんばる・・・」

『あの〜話を始めていいかな〜？』

「「「「どうぞ！！！！」」」」

「・・・・・・・・連続傷害事件？」

『ああ・・・・・・・・事件』じゃまだ無いけど』

「どゆこと？」

『被害者は主に格闘系の実力者、そういう人に街頭試合を申しこんで・・・・・・・・』

「フルボッコってわけ？」

「物騒だね〜〜」

「あたし、そーゆーの知ってるッス！喧嘩師、ストリートファイター！」

「ウエンディうるさい」

『ウエンディ正解。そういう人達の間で話題になってるんだって』

「正解・・・・・・・・だと・・・・・・・・！」

「ミュ、失礼じゃないッスか？」

『被害届けが出てこないから事件扱いでは無いんだけど、みんなも襲われたりしないよう気をつけてね』

「分かりました」

「そう・・・・・・・・」

「気をつける、つーか来たら逆ボッコだ」

「ノーヴェ、それはフラグだよ」

ディスプレイに大人の女性の写真が浮かび上がる

ん？どっかで見たことのあるような、無いような・・・・・・・・気のせいかな

「ふむ、これが容疑者の写真か・・・・・・・・」

『ええ、自称「霸王」イングヴァルト』

「それって」

「古代ベルカの確か・・・・・・・・「聖王戦争時代よ」そう、そのころの王様の名前だよな？」

「2人とも、物知りツスね」

「前にSt・ヒルデ魔法学院を見に行った時にちよつとね」

「お、お前等もあの学院にいくのか？」

「うん、ヴィヴィオやイクス、アリシアとも一緒だしね」

『だから、2人をここに呼んだのよ』

「なんでツスカ？」

「なんだまだ分からんのかウエンディ？」

「ブーブー、どうせ2人も分かつて無いツスよ」

と言つて、ウエンディが希望のまなざしでコツチを見るが・・・

「残念、分かつてるよ」

「イリヤに同じです」

「うわっ、みんながあたしをハブツてきたツス、イジメツス
〜！」

『ウエンディ、きちんと説明するから・・・さっき言った通りイリヤの家には

ヴィヴィオとイクスがいるでしょ？』

「そうツスね」

「2人とも、ベルカの王様にゆかりがあるじゃない？」

「うん、うんツス」

「さっきの奴はベルカの王様の名前を名乗っていただろう？」

「はいツス」

「イリヤは家族だし、ミユはその真ん前に家があるだろ」

『だから、2人には簡単なボディガードをしてもらいたかったの、
分かった？』

「よく分かったツス」。ようはヴィヴィオとイクスが襲われない
ように」

「私達が護ればいいのですね？」

「あたしの台詞が〜」っとウェンディが言っと「ウェンディうるさい」っとデイエチが言った
デイエチ、ソレはもうさっき言ったよ？

『うん、お願いできるかな？』

「いいとも〜」

「分かりました」

『ありがとね、2人とも』

まあ、出会う可能性は0じゃ無いから日々の鍛錬はやっぱり欠かさずしようか

と言うわけで結局練習場に行って（誰もいなかったから良かった）鍛錬をした

始業式とかの校長のあいさつって超長いよね b y イリヤ（後書き）

イ（やゝ、みんな大好きイリヤだよゝゝ！

ミ（イリヤの生涯の伴侶のミュよ

イ（またまたゝ冗談言っちゃってゝゝ

ミ（（冗談じゃないけど・・・）そっいえば作者は？

イ（どうやら、明日に向けて今から寝るそうだよ

ミ（あら、どうせパズルか本を読むと思ってたのに・・・あら？

T（ぎ、ギクッ！！！

ミ（はあ、やっぱりパズルしてた・・・

イ（今、作者が挑んでるのは950ピースのONE PIECEのヤツです

T（頑張って完成させます！

ミ（こっちの小説も頑張んなさいよ

プレシアさんは何を渡そうとしてたのかしら b y m m (前書き)

修学旅行から帰ってきましたよ〜

プレシアさんは何を渡そうとしてたのかしら by ミュ

家に帰ってきて疑問は1つ。

『プレシアお婆ちゃんが何を造ったか』

あの人はかなりマッドなところが発見されたから
出来る限り、発明品などには手を出したくなかったが

今回の犠牲者があの3人なのだ・・・つまり私にも被害が来る・・・

「マジヤベ〜ヨ、ナニガオキルンダロ、マダシニタクナイナ」

こんな感じである、誰か助けてください。お願いします

ハア・・・ミュは眠いから帰っちゃったしな〜

仕方ない、腹を括ろっ・・・

そして私は家の玄関を開けたのだった・・・！！！！

「「「チエストーーーーー！！！！」」」

「オグツ!？」

玄関から3人がイキナリ飛び膝蹴り、テラ痛ス・・・

んゝ、これは誰だ・・・？3人ともどっかで見た事あるような、
てか1人はフェイトママみたいだし

「イリヤ！どこにいったの！！」

「せつかく、わたし達の新しいデバイスを披露しようと思ったのに
ー！」

「ダメですよ、ミュさんとあんまり多く居すぎては・・・」

「ちょ、ストップ、ストップ！！誰か分かんない！！」

「くくくブ〜ブ〜」

飛び膝蹴りからの馬乗り（美少女の）・・・いやそれは役得だけどさとりあえず発言と容姿から判断して新デバで変身魔法を使ったと思うから・・・

ロート グリューンオッドアイ

- 1 紅と翠の虹彩異色は多分ヴィヴィオ
- 2 フェイトさんそっくりだからきつとアリシア
- 3 消去方でイクス

「私だけ扱いが雑ではありませんでしたか？」

「気のせいだよ」

最近考えている事がすぐばれる気がしてるんだけど・・・

「誰が誰かは分かったけどさ、周りに浮いてるのは何？」

ヴィヴィオがウサギで、アリシアがキツネ、イクスがイヌだね
うん、見ていて凄く和むよ

「これは」

「わたし達の」

「新しい」

「『デ『デバイスか』最後まで言わせてよ（下さい）！！！！」

あれ？イクスはともかくアリシアにはリンカーコアあったっけ？

「なんかねゝ偶然出来ちゃったみたい」

「偶然って・・・まあ、無い事はないか」

殆どが先天的なモノだけど確か稀に後天的に出来るってなんかで聞いたなゝゝ

「明日の授業はヴィヴィオ達は午前までだったよね？」

「そうだよー、けどノーヴェ達と一緒にストライクアーツの練習に行くんだ！」

「リオとコロナもいるしねー」

「なのでお昼は帰ってきますが夜は少し帰るのが遅くなります」

「分かった。あんまりノーヴェや他のみんなにも迷惑をかけないようからね？」

「……はい（わかりました）」

ん、そういえばなんか言い忘れてる気がするんだけど……なんだったつけ？

結構、いやかなり大事な事だったんだけど……

「ああっ！」

「……び、ビックリした（しました）……」

「……ごめんね」

「で、どうしたの？」

なのはママは知ってると思うけど一応言っておこうかなけど、ヴィヴィオ達がいたら拙いから……

「後で言うよ、なのはママ」

「うん、分かった。フェイトちゃんも呼んでおく？」

「ありがとう」

そう言って微笑むとなのはママはだらしない顔になってダラーっと

鼻血を流し、

3人は顔を真っ赤にして「は、反則だよ／＼／＼／＼」と言っていた

んで、3人が寝てから

「なのはママ、さっきの話だけど」

「お話？」

「うん、イリヤからお話があるんだって」

ちよ、なのはママがお話って言った瞬間何故か背中に悪寒が走ったんだけど・・・！

「ママ達は最近こちらで連続傷害事件が起こってるの知ってる？」

「ああ、それね。私はヴィータちゃんとかから聞いているよ」

「うん、私は聞いて無いかな」

「私も今日ノーヴェとこに行って聞いたんだけどね、その事件を起こしてるのが

確か、イングヴァルトって名乗ってるんだって」

正式名称はクラウス・G・S・イングヴァルトだったはず
うん、厨二病だね

「イングヴァルトって昔のベルカの王様の名前だったよね？」

「そうだよ、だからもしかしたらヴィヴィオやイクスに被害が及ぶかもって」

「ノーヴェ達も私達のこと考えてくれてるんだね・・・」

「私とミュはヴィヴィオとイクスのボディガードをしてって頼まれたけど

まあ、最悪の場合の話だけだね」

「その時は2人には頑張ってもらわないとね」

「うん、だからママ達は心配なくていいよ」

「ありがとね、イリヤ」

これで安心して今日は寝られるや

プレシアさんは何を渡そうとしてたのかしら by ミュ (後書き)

T (後書だぜー！！！！！)

イ (うわー、なんかハイテンション・・・)

ミ (多分、敬愛してるF20Cさんの新作が出るからね
作者の大好きなアインがヒロインだし)

T (アインハルト可愛い、アインハルト超可愛い)

アインハルトギザ可愛い、アインハルトテラ可愛い

イ (ああ、作者がアインハルト教に染まってゆく・・・)

ミ (本人はアインハルト党のつもりらしいわよ)

イ (あ、そうそう今回は次回予告！！)

ミ (今回、デバイスが新しく出たから私とイリヤ

そしてイクスとアリシアの説明会を行うわよ)

イ (ああ、多分初期設定にずれが生じる・・・)

ミ (ここら辺が作者の考えが足りないところよね)

14万PV突破！あの娘達の説明会！！

名前	イリヤスフィール（ry↓イリヤ・T・テスト たかまち ）
ロッサ	
真名	柊 咲
容姿	中学生ぐらいになったイリヤ
身長	150cm
体重	40kg
肉体年齢	13歳
魔術回路	54本封印正常稼動
覚醒魔術回路	1本完全封印正常稼動
リンカーコア	正常稼動
魔力量	SSランク相当
アヴァロン 全て遠き理想郷	正常稼動
アンリミテッド・ブレード・ワークス 無限の剣製	封印正常稼動
fate的ステータス	
筋力：C	

耐久：D
敏捷：D
魔力：A
幸運：A
宝具：E→EX
保有スキル
うっかり
チャーム
魅惑
投影
同調
強化
対魔力A
千里眼C
心眼（真）B
魔力放出A
直感A

デバイスは干将・莫耶の形をした「アーチャー」
インテリジェントデバイス
バリアジャケットは赤原礼装
起動時は干将・莫耶が最初から投影されているか弓を持っている
あと、中国拳法それも八極拳（秘門）も使える

イリヤの投影は神造兵器の投影、概念を有した剣、宝具を創る事が
出来たりする
アンリミテッド・ブレイド・ワークス
宝石剣も無限の剣製にある

名前
美遊・エーデルフェルト

真名
水城 美遊

容姿 中学生ぐらいになった美遊

身長 152cm

体重 乙女の秘密

肉体年齢 13歳

リンカーコア SS・ランク相当

fate風ステータス

筋力：C

耐久：D

敏捷：D

魔力：A

幸運：B

宝具：E→EX

保有スキル

直感A

魔力放出A

カリスマD

デバイスの待機状態はエクスカリバーの形をした「セイバー」

インテリジェントデバイス

武器は約束された勝利の剣
エクスカリバー

バリアジャケットはセイバーの甲冑

ちなみにセイバー並の回復力を誇る

なのは・T・テストロッサ&フェイト・T・T・H
たかまち たかまちテストロッサウオン

愛故の暴走、日々百合ん百合んなピンク色の空気をフェイトさんと生み出している。

イリヤ、ヴィヴィオ、アリシア、イクス、プレシアは犠牲となる

ヴィヴィオ・たかまちT・テストロッサ

アリシア、イクスをあわせてティーティーTT（高町のT、テストロッサのT）

3人娘と呼ばれている

時々、黒い雰囲気を出すようになってきた

プレシア・テストロッサ

P・T事件の主犯。公には死亡扱いなのでひっそり、こっそりイリヤが魔術を使つて

暗示をかけて、管理局にばれないようにしている。

現在はアリシアと共に地下室（第二魔法を使った屈折空間、ただし時間の流れは宝石翁の宝箱とは逆）

で発明やらをしている

アリシア・テストロッサ

アスクレピオスで蘇生した人、第一号

設定では確か5歳で死んだと思われるのでそれから4年経過して9歳になっている

リンカーコアは現在AAランク相当、戦闘スタイルはフェイトとは違い

なのはに似ているが・・・時々フェイトの片鱗を見せるあたりやはり姉妹なのであろう

ちなみに、ストライクアーツを習っている

デバイスはインテリジェントで名前は「バルディッシュ・ユニバーサル」通称ユニ

待機状態はキツネ

バリアジャケットは白が多めでなのはのバリアジャケットに良く似

ている

イクスヴェリア・T・テスタロツサ^{たかまち}

アスクレピオスで蘇生した人、第二号

身体が幼女なんだからヴィヴィオと同じ年でいいよね？

ちなみに今は普通の女の子の身体です。兵器とかじゃありません

リンカーコアは現在AA+ランク相当、戦闘スタイルはスバルに憧れていたせい

スバルに似ている、ストライクアーツでは無くシューティングアーツを習う

デバイスはインテリジェントで名前は「プルートーン」通称、ブル待機状態はイヌ

バリアジャケットはスバルの色違いみたいなもの

14万PV突破！あの娘達の説明会！！（後書き）

T（今日は修学旅行の振り替え休日だぜ！

イ（部活は有るんですよ？

ミ（まあ、頑張りなさい

T（今日はあと1話投稿出来たらいいな〜）

T（勝手ながら、アリシアとイクスのデバ名を変更しました6/4

魅惑^{チャーム}の追加と中国拳法の所を詳しくしますた6/26

名前のところと、覚醒魔術回路のところを修正しました7/1

なんと私の眼は4キロ先のものもハッキリ見えるんだよ！前編 b y イリヤ

あう、宣言通り出来なかった・・・

なんと私の眼は4キロ先のものもハッキリ見えるんだよ！前編 b y イリヤ

朝、窓からは太陽の木漏れ日が部屋に入り、外からは小鳥のさえずりが聞こえてきた

「イリヤは今日もないの？」

「ここにいますよ？」

ヴィヴィオが探していたから気配を絶って後ろに立っていた
これは中々気づかれないな

「わわ！ビックリしたなもう！」

「ゴメンゴメン、今日は一緒に行けるよヴィヴィオ」

すると、アリシアとイクスがやって来て

「・・・これから一緒に行けないの？」

「そんなにミュさんがいいんですか・・・？」

身長差からか自然と2人が私を見上げる形になるので、その上目遣いで見てくるから

罪悪感が芽生えてくる・・・

「うーん、それじゃ今日ミュに聞いてみるね」

「絶対だよ？」

ちよ、怖い怖い。まあ、ミユと一緒にいるのは色々あるからなんだよね

例の事件は比較的夜に多いから朝は大丈夫だと思うけど・・・

まあ、今日は念には念を入れて行く事にした

今日の夜はノーヴェがいるから安心出来るね～～

教室に入って先の事を話してミユからOKを貰っていると、え～とアインハルトさんだったっけ？が話しかけてきた

「あのテストロッサs「あの出来ればイリヤって呼んでくれない？そっちは

あんまり呼ばれなくてね～～」・・・イリヤさん

「さんもいらないうってアインハルトさん」

「アンタもさん付けしてるわよ、イリヤ」

「な、なんと！」と私が言うってアインハルトさんはポカンとしていた・・・私はそういう反応もするのにな～～

「・・・分かりました。ですが私もお2人の事を普通に呼ばせて頂きます」

「さっきから言っているのにね〜」

「そうやって確認を取るところがまた可愛いわね」

「〜〜！！！！／／／／／」

ああ、こんな反応をしてくれのはアインだけだよ。あの3人+2人（リオ・コロナ）はこんな初々しい反応は全然ないからね

そんなこんなで4時限目も終わり放課後になって今日はなんとなくで学食に来てみました

ちなみに前回来た時は適当に頼んだので良く覚えて無いんだよね

「ねえ、アイン。ここのお勧めって何なの？」

「あまりここには来ないので私自身は良く分かりませんが
噂によるとジャパニーズ・ラーメンが人気のようです」

味はソイソースとミソがおいしいらしいです、とアインが言う
・・・ここまで地球の文化がミッドにも芽生えているとは・・・
てかネーミングセンスを疑う名前だね・・・作者・・・

（気にすんな）

うわ、電波を受信してしまった

「普通においしかったね」

「そうね」

「私はあのソルト味が気に入りました」

おお、中々のラーメン好きだね」

普通の人はソイソースかミソが好きだと思うけど
アインはどうやらサッパリ系が好きみたいだね」

「けど、ラーメンってカロリー高いのよね」

「うう・・・美容の大敵です・・・」

「んゝそんなに気にすることじゃないと思うけど・・・」

「「女の子は気にするのよ（するんです）！！！」」

「は、はい！」

2人ともスタイルいいし可愛いんだから

もっと自由にしたらいいのに。食べたら動いて燃焼させればいいだけだし

「まったくこの朴念仁は乙女心が分かってないわね」

「そうです、イリヤはもつと女の子を知る事から始めるべきです」

いや、知るっていわれても・・・よく分かんないモノはよく分かんないよ

「結局、2人は替え玉頼んでたけどね」

「あ、あれはラーメンは汁の方がカロリー高いんだからいいのよ！」

「そうです！動いて脂肪を燃焼させれば・・・」

話していくにつれ段々声に元気が無くなって行く2人。

その視線の先は胸元に向けられていたが・・・まあここは・・・

「私は気にしないよ？胸の大きさなんt」

バチン、バチン！！

顔を真っ赤にした2人に思いつきりビンタされた

アインは用事があるって言って一緒には行けなかったけど

私達2人で買物に出かける事にした

・・・ちなみに私の顔が真っ赤なので道行く人がみんな振り向いて

私の方を見てきて来たが、ミュに「自業自得よ、バカ」と言われた。
シュン・・・

「それでさ、それでさリーダー！」

「ああ、分かった分かったから。ちゃんと前を向いて」

ドンッ！

瞬間、誰かとぶつかってしまった・・・ってすぐ謝らないと！

「「う」、ごめんなさい！」

「私（俺）が前を向いていなかったから・・・へ？」

そこで出会ったのはえ〜と礼儀正しい不良？さんでした〜

だ・か・らなんでこうなるの？

「おい、そっちは準備いいか？イリヤ」

「OK、大丈夫だよ」

「今回のルールはどちらかが負けを認めるまでとします」

今来ているのは近くにあった公共魔法練習場、そこでさっきぶつかったハリーさんとその連れの方々、そして私とミュウがいます。ついでに言つと審判はミュウです

成り行きだけでも説明しようか

まず、謝り会になる

←
埒が明かなくなるから、どうしたものか

←
とりあえず、戦って負けた方が悪いということぞ！

とりあえず、一言・・・

なんでさ

まあ、今から色々言っても遅いよね。さあ、戦いに集中しよう
相手は確か我流の近接射砲撃型、あだ名は「砲撃番長」
よし、勝てる。何故確信出来たか・・・それは

対魔力Aだから、なのはママで例えるとデイベインバスターレベル
なら効かないんだよね
あの人は、本当に天才のレベルだけど効果があるのはやっぱり収束系
じゃないと殆ど意味が無いんだよね

けど、それでも殴りや蹴りは普通に喰らうから気をつけないと

あれ、普通に剣を投影して殴りや蹴りの攻撃を防いで隙があったから攻撃したら

終わっちゃった。まあ、私は卑怯技の宝庫だし？仕方ない結末だろう

「グス・エグ・うわーん！どうして私の魔法が効かないんだよー！！」

うー、あれはON/OFFが出来る代物じゃ無いし・・・

「おい！お前、何卑怯技使ってたー！！」

（いや、1割くらいで戦ったんだけど・・・）

「もう一回しろよ！今度は絶対リーダーが勝つー！！」

あれ、ハリーさんの涙が凄くなってきたぞ！？

「う、う、うわー！！！！！！ん！！！！」

「っ、っ、リーダーー！！！！」

「あなた達は、魔法にAMFがある事も知らないのかしら？」

「け、けどそれってランクでいえばAAAランクのモノじゃねえか」

「そうだが、いくら強いからってそんな超難しい魔法が出来るわけが・・・」

「出来るわけが無いっていうの？それならあの魔法が消える現象はどう説明するの？」

「くぐぐぐぐぐ」

「お前等もういいって・・・俺が弱かっただけなんだから」

・・・ミユはペテン師の才能があるかもね
とりあえず、対魔力のウソの説明をミユがしてるよ

よく考えると絶対不自然だね。まあ、直撃の前に魔力が霧散する
ってところは似てるけど

「ところでよ、イリヤ。そろそろ怪我の方はいいんだが・・・」

「ダメ！まだ完全に治ってないんだから」

ハリーさんを膝枕して現在進行形で治療の魔法を掛けています
いや、それくらいは出来てよかったよ、私

「くっ、それじゃ任せるぜ・・・ところでよイリヤ」

「ん？なに」

「お前はインターミドルに出るのか？」

ディスガサマサンダエネジヨン
D S A A 公式魔法戦競技会

その10歳から19歳までの女子が出れる大会で、インターミド
ル・チャンピオンシップということは・・・

「わたしは出ないっていうか出れないんだ」

「何でだ？明らかに10歳は超えてるだろ？」

「いや、その制服を見て気づかない？」

「・・・え・・・お前って・・・」

ハリーさんが口をパクパクさせながら大声で言い放った

「男だったのか――！！！？?」

新鮮なりアクション、ありがとうございます！

それ以降はハリーさんは顔を真っ赤にして、「は、初めて男に膝枕された／＼／＼／」
とか言つて、話を聞いてくれなかった。怪我の治療が終わったから膝枕をやめようとしたら
「あ・・・その、もうちょっと・・・」とか言つてずうつと膝枕をしていた

気がつけば陽も暮れてきたのでハリー達の驕りで晩御飯を食べさせてもらった
ちなみにハリーって呼び方に変わっているのは本人からの申し出だった

なんと私の眼は4キロ先のものもハッキリ見えるんだよ！前編 b y イリヤ

T (新たなフラグのか・お・り！！！)

Twiceです！

イ (なんか作者がウザイですけどイリヤ・T・テストロッサです！)

ミ (私、このままだとイリヤを盗られちゃうんじゃないかしら
ミュ・エーデルフェルトです！)

T (いや、vividの三巻が買えたからインターミドルの娘達の
事がよく分かったよ。今回は一番出しやすそうだったハリーに
出て来てもらいました！・・・そしてフラグも建てました)

ミ (こ、の、ま、ま、じゃ、わ、た、し、のイリヤが盗られちゃう
じゃない！)

T (いや、一応ハーレムだし？いいんじゃない、別に)

イ (中途半端ですいませんが次回の後編もお楽しみに！)

なんと私の眼は4キロ先のものもハッキリみえるんだよ!!!後編 byイリヤ

テストが終わって考えてたのを投稿、

今回は三人称の練習ですのでおかしい所があつたら教えてください

(m|m)

「おお、やってるやってる！」

「イリヤ、私はここからじゃ見えないから帰っていい？」

「ええ〜！私1人じゃさびしいよ〜」

「ウソおつしやい。アンタに怖い物なんてないでしょ」

「・・・もしかしてミュ・・・高い所怖い？」

「／／／／何言ってるの！？あんたは！わ、私がた、高い所が怖いなんて・・・」

「ごめんね、ミュ。気づいてあげられなくて・・・その、怖かったら帰ってもいいんだよ？」

「・・・ええ、もういいわよ。帰ってやるわよ！！」

これが世に聞く逆切れか？

え〜と、今北産業の人へ

魔力反応発見

←
けど近くで見てたられるよね・・・

←
なら、遠く離れたビルの屋上から！

って感じ。今北産業の意味が分からない人はググレカス

・・・って作者が言ってた♪（えっ？言ってないよ）

アーチャーっのスキルっていうか、凄く眼がいい私は4キロ先もハッキリ見えるんだよ!!!

・・・聞いてくれる人がいなくてさびしいよ・・・

ん、どうやら戦闘は終わったっぽいね・・・急いで行こう・・・

〈10分前〉side三人称

2つの月が輝くミッドチルダの街に1人の赤毛の

少女　少女といっても大学生くらいだが　が歩いていた

名をノーヴェ・ナカジマと言う。4年前の通称「J・S事件」にて主犯であった

ジェイル・スカリエッティの仲間であったが、現在はその罪を認め更正しナカジマ家の

家族として幸福な生活を送っている。

彼女は先ほどまで、ヴィヴィオ達と共にミッドチルダで最も有名な格闘技

「ストライクアーツ」の練習に励んでいた。まだ幼いヴィヴィオ達にとって

ノーヴェ程の実力者がいることはかなり有意義な練習となるだろう

現に家族であるスバル・ナカジマは湾岸警防隊防災課の特別救助チーム、すなわち

エリートであるそのスバルと相打ち、もしくはギリギリで勝つか負けるかのレベルである

彼女は今、ヴィヴィオ達と別れて救助隊の装備調整という名目のもと別行動をしている。しかし、装備調整というとはウソであろう
聡い読者様なら分かつている筈だ。きっとそうにちがいない

彼女は先ほどから不穏な雰囲気を感じていた、それは彼女の経験から言えば

それほど危険なモノでは無かった。当然、同じ戦闘機人であるウェンディも

分かっていたと思う・・・多分

しかし、先日家族であり姉であるギンガから通り魔の噂を聞いたのである

その通り魔はかの豪傑「霸王イングヴァルト」の名を名乗っていたのだ

彼女の連れには、聖王のクローンであるヴィヴィオと

冥府の炎王のイクスがいた。その通り魔の狙いが2人であるとすれば当然、2人を守りながら戦わなくてはならない。いかにウェンディがいるにしても

こちら側には、先ほどの2人を含め5人のそれなりに戦える少女がいても

チームワークなどほぼ皆無といっても過言では無いだろう

さらに通り魔は名のある実力者を次々と倒しているのだ

欲を言えば、イリヤ、もしくはミユがいれば話は変わっていただろう
しかし、2人は4キロも離れた場所にいるのだ

当然、ノーヴェは気づかないだろう

仮に、通り魔が2人を狙いに定めているがどれがどれか分からないのならば

自分が1人赴けばいいのだろう。そうすれば必然的に自分に標的が向くと考えたのだ

少なくとも、ノーヴェは有名だ。もちろんよい意味でだ。

通り魔も気づいているだろう。

・・・そして、彼女の考えは当たった

「ストライクアーツ、有段者のノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします」

それは、件の通り魔だった。先ほどから並列思考マルチタスクにて戦闘の準備を整えていた

かいがあつたというものだ

「貴方にいくつか伺いたい事と、確かめさせて頂きたい事が」

電灯の上に立ち2つの月をバックに立つ少女は実に幻想的に見えたが眼元を隠しているバイザーがそれをぶち壊していた

「質問するならバイザー外して名乗れ」

「失礼しました」

すると、少女はバイザーを外した。普通ならば顔を隠す意味合いで外さないのだから

彼女は写真でもバイザーをつけていなかったなので別にどっちでもいい、という感じだろう

「カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト。

『霸王』を名乗らせて頂いています」

霸王、それはベルカ戦国時代の王様の名前。男性であると言われているが

今残されている文献を詳しく読んでいくと、どうやら女性かもしれないと噂されている

つまり、かの聖王オリヴィエは百合だったという・・・！

「何か不穏な電波が・・・どうした？」いえ、何でもありません」

いかん、ばれそうになった・・・自重、自重っと、

「テメーが噂の通り魔か」

「否定はしません」

碧銀の長い髪をたなびかせながら電灯から飛び降りて、さも当然と言いつつ

「伺いたいののはあなたの知己である『王』達についてです」

「聖王オリヴィエの複製体クローンと冥府の炎王イクスヴェリア」

あまりにも聞き覚えのありすぎる王達だ。それゆえにノーヴェには緊張が走った

幸いにも、人物の特定には至ってなかったのは儲けモノであろうだが、安心には繋がらない

「貴方はその両方の所在を知っていると・・・」

「……知らねえな」

「聖王のクローンだの冥王陛下だのなんて連中と知り合いになった覚えなんてねえ」

ノーヴェの心に浮かぶ、無邪気な2人の少女の笑顔
今まさに2人の少女のその笑顔が壊されるかも知れ無いのだ
それ故に、ノーヴェは静かに怒る^{いか}

「あたしが知ってんのは、一生懸命に生きているだけの普通の子供達だけだ！！！」

「理解できました それでは・・・」

ノーヴェは身構えた、いつでも相手の攻撃に備えられるようにだが、その当ては外れた

「魔王と騎士王、そして・・・英雄王については・・・？」

魔王と聞いて速攻で浮かんだのがなのはだったがすぐにその考えを取り消した

なぜなら、突然脳内に「少し・・・頭冷やそうか・・・」という念話が流れてきたからだ

次に騎士王、と聞いて連想したのはシグナムだった

烈火の将と言われる彼女にぴったりとノーヴェは思った

だが、英雄王とは何だ？聞いた事が無い

管理局にも英雄と呼ばれる人は極少数だがいる。しかし彼女が言っているのは

英雄『王』だ、過去の英雄達の上に立つ存在でも言っているのだろうか？

「悪いが、さっぱりだ」

「・・・そうですか、それらの件については他をあたる事にします」

急に、少女の顔に曇り始めた、がそれもすぐに終わる

「ではもう1つ、確かめたい事が」

瞬間、空気が変わった。それもかなり濃密に・・・

当然、今度こそノーヴェは身構えた

「貴方の拳と私の拳、一体どちらが強いのかです」

なんと私の眼は4キロ先のものもハッキリみえるんだよ!!!後編 b y イリヤ

イ（今回は色々と伏線を張ったね〜）

T（だな、霸王が女体化の可能性と魔王と騎士王、そして英雄王だ

ミ（あんたがどうつなげるか知らないけどちゃんと回収しなさいよ？

イ（そうだ、そうだ〜）

T（分かってるよ！俺だって色々考えてるんだよ〜）

イ・ミ・T（次回、「アインのあれって知らない人から見たら厨二病じゃない？」

T（オイ！誰だこんな事言うやつ！！出て来い、アインハル党全員が叩き潰してやるわ！！！！

ミ（約束された勝利の剣！！！！！！
エクスカリバー

T（あべし！！！！

アインってクラスだと、かなりおとなしいのよね b y ミユ（前書き）

お、遅くなりました・・・後は、ヴィヴィ娘との戦いを書けば

一巻の戦闘描写が終わる・・・！

先に言ってますが、作者はどうしようもなくアホの娘、じゃない子なので

あれ？って所や矛盾、ここ、こう直した方がいいお！って所があれば教えて下さい！！！！

アインってクラスだと、かなりおとなしいのよね b y m m

「防護服と武装をお願いします」

「いらねえよ」

「そうですか」

「よくみりやまだ子供じゃねえか、なんでこんな事してる？」

碧銀の少女 もう、アインハルトでいいよね？ にノーヴェが
たずねた

すると、アインハルトはしばし考え、うつむき加減に言った

「 強さを知りたいんです」

「強さ・・・だと・・・？」

「はい、誰にも負けない・・・そして二度と大切な人を失わない強さが知りたいのです」

「何だってんだテメーは・・・子供が考える事じゃねえよ」

「・・・それでも、私は・・・」

刹那、ノーヴェが突進した。そしてその勢いを生かしたまま膝蹴り、そして次の攻撃、滞空時間の中で攻撃できる限界は今は1度のみ

それに今出来る最大限の力を運用し、右手に魔力を集めそして一撃を喰らわす

標的は、腕をクロスさせ膝蹴りと先の一撃を防御する

全身の力を使った一撃は、防がれてしまったが相手を5〜6m程吹き飛ばし

それでも、ダメージは与えた。これで多少は有利になったであろう

「（ガードの上からとはいえ不意打ちとスタンショットをマトモに受けきった・・・

ち・・・言うだけの事ことあ、あるってか）

認識が甘かった。相手はただの路上格闘者ストリートファイターでは無い、と

もう、不意打ちは使えない。最初の一撃で事を終わらせて事情を聞く予定だったが

どうやらすぐさま終われそうにない

なら、やる事は1つ。敵を全力で叩きのめす事だけだ

「ジェットエッジ」

【Start up】

愛用の武装であるジェットエッジを起動し、防護服であるバリアジ

ジャケットを装着する

そして、ジョットエッジはノーヴェの格闘形体に適したローラーブ
ーツの形状となり

バリアジャケットは紺に準じた色合いのモノでそれはナンバーズの
それに良く似ていた

「ありがとうございます」

アインハルトが礼を言う、それに応えるようにノーヴェは言った

「強さを知りたいって本当かよ？」

「正気です、そして今よりもっと強くなりたい」

「ならこんな事してねーで、真面目に練習するなりプロ格闘家目指
すなりしろよ！」

確かに、路上で通り魔紛いの事をしているよりよっぽど有意義であ
ろう

4年前の大型テロ事件、J・S事件を機にミッドチルダの魔導学や
剣術、そして格闘術

などが飛躍的に向上きだしたのだ。それだけ先の事件の影響が大き
かったのだろう

「単なる喧嘩馬鹿ならここでやめとけ、ジムなり道場なりいい所紹
介してやつからよ」
とこ

「ご厚意痛み入ります。ですが私の確かめたい強さは　生きる
意味は」

「表舞台にはないんです」

すると、アインハルトは構えをとった

「（構えた・・・この距離で？・・・エリアル ミドルレンジ空戦？射砲撃？）」

様々な疑問がノーヴェエの頭の中を駆け巡るが、そちらに注意を注ぎ過ぎた
眼では見ているが、考えの方に神経が巡り敵のことを疎かにしてしまった

ゆらり、とアインハルトが動き始めたのだ

ドンッ！

一瞬の攻防、チャージ突撃からの一撃がノーヴェエに襲いかかる
再び攻撃に移るが、先ほどとは違う歩法ステップだった

ダンッ！

「ち・・・ッ！」

ドンッ！！！！

ノーヴェエが歯を噛み締めた直後だった・・・アインハルトの拳がノーヴェエの腹部を直撃したのは

「が・・・・・・・・ッ！」

痛みあまり普通ならもがき苦しむほどだが、ノーヴェは日々の訓練と戦闘機人であるが故の

頑丈さから、ある程度まで回復した

ターゲット
敵から距離をとったがどうやらかなり響いたらしく息を荒くし腹部を押さえアインハルトの方を向く

「列強の王達を斃^{たお}し、もう2度と大切な人を失わないためにベルカの天地に覇を成すこと・・・」

それが私の成すべきことです」

「寝ばけた事言ってんじゃねエよ！」

痛みを堪え、ノーヴェは疾走する。その胸に宿る想いをぶつけるためだけに

「昔の王様なんざみんな死んでる！生き残りや末裔だってみんな普通に通に暮らしてるんだ！！」

「それに・・・失った人は・・・もう帰ってこないんだよ!!!」

拳と拳のぶつかり合いの最中、彼女の脳裏に残った姉達の姿それは、ナカジマ家に来るのにもっと前の話。チンクやセイン達とは別の道を歩んだ4人の姉と事件の中で命を堕とした1人の姉、失ったものが帰ってくるのならば、それは奇跡だろう・・・その奇跡を起こした者はいるが・・・

「・・・弱き王なら・・・この手で屠^{ほふ}るまで・・・」

「この、バカッたれが!!」

「ベルカの戦乱も聖王戦争もツ！ベルカって国そのものも！！
もうとつくに終わってんだよッ！！！」

魔法陣からISブレイクランナーの固有能力、エアライナーが発生する

同時に、アインハルトをリング状のバインドで四肢を固定し
ノーヴェの持つジェットエッジがフルパワーで疾走し、自身の身体
で最も

最高の一撃を生み出せる、右足に魔力を込める

リボルバースパイク

右足から放たれた強烈な一撃は敵に直撃する

ターゲット

「！？」

が、アインハルトはノーヴェの右足を掴んだ。顔への直撃を受け入れ、接近して来た相手を仕留める、

いわば肉を切らせて骨を断つ、というものだがあまりにも代償が大き過ぎる

「まだ、終わってないんです」

「（カウンターバインド!?）」

今度はノーヴェの身体が鎖状のバインドによって動きを封じられた腕の一振りによって碎かれる程脆くなっていたノーヴェのバインドから抜け出し

先のバインドで動けない相手を仕留めるべく、腕を振り上げ一撃を繰り出す

「（どうかしてる、防御を捨てて反撃準備を……………ッ!）」

カウンターバインド

「私にとってはまだ……………何も」

霸王 断空拳

振り下ろされた拳は迷いなくノーヴェに直撃した

今ここに、正史から歪み始めた新たな物語が始まりの鐘を鳴らした

アインってクラスだと、かなりおとなしいのよね　b y ミユ（後書き）

T「最近、アイポッドタッチを買ったT w i c eです！」

イ「次回は出番があります！イリヤだよ！」

ミ「次の出番はいつかしら・・・ミユよ」

T「今回はノーヴェVSアインハルト、過去の中で最も力を入れて頑張りました。どうか悪い所とかあったら教えてください！」

イ「ところどころ、原作と台詞が違うけど・・・？」

T「うん、もうちょっと先の話で分かるようにするけど修正したりするから、また変わるかもしれない」

ミ「とりあえず、毎日これを見てくれる方がいるんだから頑張んなさいよ？」

T「OK!!!、だけど今は部活が超ー忙しいのであんま更新出来ませんと思いますがヨロシクお願いします!!!」

覇王の悲願　ひとときのまどろみのなかで（前書き）

新たなオリキャラのよ・か・ん！

一巻が終われば、こいつが本編にでてくるかもね！

覇王の悲願　ひとときのまどろみのなかで

「弱さは罪です」

「弱い拳では……………」

「誰の事も守れないから」

誰も聞きはしないが、アインハルトはその胸の内を明かした
ただそれはノーヴェに言っているだけでなく、そう自身に言い聞か
せるように……………

場所は変わり、そこは都内某所のコインロッカーだった

人気はなく、そこには先ほどの戦闘のせいで疲れが見えている少女だけだった

「（彼女の一撃、凄い打撃だった・・・危なかった）」

碧銀の髪を揺らしながら、ふらふらと歩き・・・ロッカーに勢い良くもたれ掛かった

「（この体は、間違いなく・・・強いのに）・・・武装形態・・・
・解除・・・」

自身を包んでいた変身魔法を解き、霸王イングヴァルトからアインハルト・ストラトスに戻る

独特のジャケットから解き放たれた彼女は、白いシンプルなワンピースを着ていた

「（私の心が弱いから・・・帰ったら、少しだけ休もう。
眼が覚めたら、また・・・）」

「!？」

突如、体に響く痛み。思い出すは自身の一撃を放つために受けた彼女の本気の蹴り

時間差を置いて、じわじわと効いてきたようだ

「（だめ、こんなところで倒れたら・・・・・・・・・・）」

少女の健闘虚しく、体は言う事を聞かずただ地面にひれ伏した

「待つてください、■ ■ ■！貴方一人では危険すぎます・・・私も・・・私も戦います！！」

「要らぬ世話だ、霸王。我をなめているのか？あのような汚物を我が一人で叩き潰せぬと？」

「いえ・・・そんなわけがありません・・・ですが、貴方は先ほど千人を超える軍勢と一人で戦ったばかりではありませんか！」

「あれは我が本^{オレ}気を出しただけの事・・・ただそれだけだ。それよりも、

見よ霸王よ・・・これが 英雄だ」

sideイリヤ

「ノ〜ヴェ〜、大丈夫？」

「蹴りついでにセンサーもくつつけた・・・てイリヤ！テメエいたんなら・・・ってお門違いか」

『ふふ、そうだね。負けたノ〜ヴェがダメなんだから』

「うんうん、てか私が手を出したら絶対ノ〜ヴェ怒るでしょ？」

「そうだな、うん・・・ってこんな事してる場合じゃない！早く犯人を追わねえと！」

あれ、大丈夫だったの？という、私の心配を他所に勢い良く立ち上がる・・・が

「ひゃう！？・・・痛たたあ」

「・・・無理せずにね。もう少しここにいていいよ、センサーの位

置さえ分かれば
すぐに捕まえられるし」

「ああ、分かった。それでいいよな？スバル」

『いいよ、それとイリヤ。その子はどうやらこのコインロッカーに
いるみたいだから

その子の持ち物も持って、私の家に来てね』

久々に出番があつたアーチャーに犯人の現在地が示されたディスプレイが映し出された

「それじゃ、行つてきまゝす」

「お、いたいた・・・つてアイン！？」

え、ちょっと似てるとか思ったけどアイン！？クラスじゃ超ー静かで、おとなしくて

それでいて、ちょっと面白いところがある・・・あのアインが!?

「とりあえず、荷物、荷物つと・・・」

えーと、あれ、学生証だ・・・いや、持ってちゃダメでしょ

学校終わってからかなり時間あつたし・・・もしかして今日一緒に帰らなかったのって

ふう、・・・こんなところかな?

「さて、スバルさんのところに運ぼうか」

「■■■■ー!!!・・・嫌、嫌、嫌・・・お願い、死なないで、お願い・・・!」

「時空の果てまで、この世界は余さず我の庭だ。故に我が保証する。世界は決して、

そなたを飽きさせることはない」

「えっ・・・？」

「そなたにこの短剣を授けよう・・・その剣には不幸や呪いを振り払う力がある、霸王家の財とせよ」

「よろしいのですか・・・？」

「構わん。我の財宝がどれだけあると思っているのだ？」

「王よ、私は貴方が・・・！」

「言うな、霸王」

「しかし！」

「美しい者は、手に入らぬからこそ、美しいのだ・・・我とて、後悔がない訳では無い」

「・・・！」

「さらばだ、霸王・・・いや『イングヴァルト』」

「・・・さようなら、英雄王『クロエ』」

覇王の悲願　ひとときのまどろみのなかで（後書き）

「あ~~~~と~~~~が~~~~き~~~~」

ガンダムだっ!!!」

イ「アトガキガンダム!？」

ミ「アカツキガンダムのパクリみたいね」

「さて、今回はのちの伏線になろうとする回です・・・いつ回収されるか知らないけど・・・」

イ「ダメじゃん!」

ミ「ただでさえ、一巻が終わったあとになんかするのに
無駄に伏線ばかりする奴ね・・・それに海に行くのはどうなった
の？」

「ギクッ! いや、あれのこと忘れてたんだ、てへっ」

イ「キモッ!」

ミ「いま2部までやってたけど、季節はもう夏よね? 昨日今日って
30度は

超えてるところもありまくりよ? 実際、あんたも暑い暑いって言
ってたでしょ」

T「・・・言い返す言葉ありません」

？「ハッハッハ、やはり阿呆だな。作者」

イ・ミ「あつ！度々某アインハルトLOVEな小説の私達の感想コーナーに出てきた奴だ！！！」

？「次回『シリアス？なにそれおいしいの？ b y イリヤ』だ。私の活躍を期待している」

イ・ミ「アンタはまだまだ出てコレナイから！！！」

前略 気づけば、もう夏だね!!! Part 3 (前書き)

前話からのシリアスっぽい雰囲気をつぶ壊すぜ!!!

もう、わけがわからない、わけワカメだよ!!!

キャラ? なにそれ、おいしいの?

前略 気づけば、もう夏だね！！！！ Part 3

ああ、私達は夢でも見ていたのだろうか

まさに、地獄を体験しているといっても過言ではない

幾たびの戦場を駆けぬけ、その手に勝利を掴んだのはまやかしかつたのか？

思い起こせば、まず海の家がおかしかったのだろうか

この瞳が映すのは・・・赤い、紅い、アカイ

そう、真っ赤な・・・血の色よりも濃い、赤

麻婆豆腐だ

海の家、それは今回限りで地獄と化していた

何故、何故・・・！海の家に麻婆豆腐しかないんだ・・・！！！！

しかも、泰山クオリティ・・・！！！！

店員がマテ娘3人組に気づいたのがなんで注文してからなんだ！！！！

目が痛い・・・

「「「「「目が、目がああああああああ！！！！！！！！！！」」」」」

マグマなんか比じゃないくらいのアカイナニカ。その湯気は熱湯を掛けられた方がまだましだ

「しかし、魅さん・・・こんなにも糞暑いのもよもや麻婆を頼む若い衆がいるようだ」

「ふっふっふ、クロエさん・・・ワタシの創る麻婆は人すらも操るアルね」

「それだけではないぞ、我^{オレ}の財の中で人を呼ぶ香りの宝具を使った。それもあるだろう」

「「ふっふっふっ！！！！／ハッハッハッ！！！！」」

「どうしたイリ・・・ざっ・・・お客達よ？冷めた中華料理など死ぬほど不味いぞ？」

「あつつあつのときに食うのが一番ネ！」

「ハリーハリーハリーハリーハリーハリー」

「食うしかないのか・・・！」

「わ、わたしも食べないといけないの・・・！？」

「ディエチゝ嫌ッすゝ、死にたくないッすゝ！」

「きっと大丈夫よ・・・多分」

「どっち何スかゝゝ！！！」

「クロエさん、あゝん？」

「なん・・・だと・・・！？」

T E R A K A O S U

犠牲者一覧

イリヤ

クロエ

一般雑種

数の娘戦隊の数名

壊れかけたビデオより　さいど『ロリーズ』

世界は、ギャグ補正に包まれた！！！

「幼女！　幼女！　幼女！」

「ロリ！　ロリ！　ロリ！」

「『ロリばんざー』……………い……………」

「こ、こわい……………」

「はあ、はあ、はあ」

「この人たちは変態です！」

「ハア、ハア、ハア」

貴様等雑種に足りないものは、それは情熱思想理念頭脳気品優雅さ
勤勉さ！

そしてなによりも 速さが足りない！！ 速く答えろ！！！！」

「「「全力でやっちゃって！！！！！！」」」

アンリミテッド・ブレイド・ワークス
「無限の剣製！！！！！！」

ゲート・オブ・バビロン
「王の財宝！！！！！！」

ザクザクザクザクッ！！！！！！

「「「ブ、ブヒーーーーー！！！！！！」」」

「安らかに、眠れ。醜い豚共め」

「ああ、すっきりした。クロエ、喉渴いた、お酒頂戴」

「よかるう。今日は無礼講だ！……！」

前略 気づけば、もう夏だね!!! Part 3 (後書き)

オヤスミですか、そうですか。また今度だね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6938o/>

ふえいと！/リリカルイリヤ～！！ ～錬鉄者への道～

2011年9月2日20時02分発行